大乘經同前

廿二日

十種供養　如法經十種供養（經衆太子堂、唱導良憲法印、）

八講　法事讃（清和院住持以下、）

廿三日、御八講開白、

廿四日、第二日、

廿五日、第三日、薪行道、

廿六日、第四日、

結日　廿七日、結日、（御經供養、）房聖法印、

律家勤行　廿八日、律家勤行、

夕曼陀羅供（三寶院、）

廿九日、等持院法花堂、

陞座（東陵和尚、）拈香（放牛和尚、）

請僧（諸山以上前住、）大衆諷經

一日經　天龍寺一日經（筆者廿人、）

拈香（住持春屋和尚、）

別時念佛　此外

非人施行　五山以下禪院一同拈香諷經、

諸律院一同勤行、

道場十餘ヶ所別時念佛、

三ヶ日非人施行、

以下略之、

八講僧名　八講僧名

證義者　證義者

前僧正懷雅

僧　正慈能

講師　講師

法印權大僧都（興）範忠

（寺）靜感

（山）慈俊

寺房聖
山良憲
權律師良懷興
圓守
山大法師良壽擬講、
東經辨
東義寶

二十六日、庚申、足利基氏、相模大山寺衆徒ヲシテ、天下安全ヲ祈禱セシム、

〔相州文書〕七大住郡大山寺八大坊藏

天下安全祈禱事、殊可致精誠之狀如件、

貞治三年四月廿六日　（基氏）（花押）

大山寺衆徒中

北朝記錄所雜訴沙汰アリ、

〔師守記〕三十六〇帝國圖書館本　四月廿四日、戊午、天晴、今朝召次有末持來記錄所廻文、是明後日廿六日、庭中式日之上、可有沙汰云々、家君故障搆得者、可參仕之由、被載散狀、予故障之由、載散狀了、廻文注裏、

散狀

（裏書）四位大史故障候、四位大外記故障搆得者、可參仕候、
刑部卿
大學頭
中大外記
大夫史
主税頭故障候、掃部頭
博士大夫判官
大博士故障候、
大判事

右來廿六日庭中式目（日カ）之上、可有御沙汰事、各如法辰一點可被參記錄所之狀所廻如件、

貞治三年四月廿三日

廿六日、庚申、天陰、朝間降雨、午斜已後雨脚休、申剋屬晴、〇中略今日無記錄所庭中、寄人各不參之故也、庭中訴人同無之云々、開闔同不參、以召次有末進著到云々、

庭中ノ儀無シ

雜訴沙汰參仕ノ人々

雜訴沙汰被行之、大宰權帥仲房卿、直衣、下絡、藤中納言時光卿、直衣、新藤中納言忠光卿直衣、等參仕、職事頭宮內卿信兼朝臣同參仕、

二十八日、(壬戌)是ヨリ先、陸奥飯野八幡宮神主伊賀盛光、好島新兵衛尉ノ、同社領同國好島西莊内好島田浦田打引ノ事ヲ幕府ニ訴フ、是日、幕府、好島新兵衛尉ヲ召喚シ、尋デ、其入部ヲ停メ、下地ヲ同社ニ交付ス、

一旦御教書ヲ奥フ次ト雖モ第ノ遵行ヲ亂入狼藉ス岩城隆教眞偽ヲシテ尋問セシム

〔飯野八幡宮古文書〕乾

伊賀備前守盛光申陸奥國好島西莊内好島田浦田打引事、訴狀具書如此、早可參決之狀如件、

貞治三年四月廿八日　　左京大夫(斯波直持)同上判

好島新兵衛尉殿

陸奥國岩城郡飯野八幡宮領同郡好島田打引事、好島新兵衛尉、聊依有申之子細、一旦雖被與御教書、不經次第之遵行、恣就致亂入狼藉、仰岩城周防前司隆教、尋問眞偽之處、如請文(載文)誓者、狼藉之篇□議々々、爰雖帶御下文御教書、不稟遵行隈(儚カ)令入部者、召置其地、注申京都、可奇(愛)捐後訴之旨被定法訖、此上者於新兵衛尉所給御教書者、所召返之也、至下地者、任相傳神領而如元可令領掌之狀如件、

貞治三年十二月廿六日　　左京大夫判同上

神主備前守殿

盛光ノ訴ニ相違ナシ

飯野八幡宮神主備前守盛光申社領事、好島新兵衛尉、今年六月一日打入神領、致押妨、及放火狼藉之由、就訴申、尋下之處、如今年八月二日請文(載文)誓者、盛光訴申無相違云々、縱雖有其理、稟次第之遵行、可遂入部歟、無左右自由亂入、不遁其咎(所カ)訴、詮於社領者、盛光令領掌、可致御祈禱精誠之由、可仰含之狀如件、

貞治三年十二月廿九日　　左京大夫判同上

磐城周防前司殿

是月、義詮、攝津住吉社ニ詣ス、

〔住吉詣〕○群書類從本

寶篋院贈左大臣義詮公、

貞治三年卯月上旬のころ、津の國難波の浦みむとて、かの所にまうでけるに、淀より船にのりて、こゝの河面、かしこの山々をながめ行に、ころしも卯月の初めなれば、ちり殘りたる岸の山吹をみれば、春のなごりぞ忍ばるゝ、

淀ヨリ船ニ乘ル

八幡山鳩ノ峯ヲ遙拜ス

垣ねの雪か卯花に、山郭公ぞをとづるゝ、夏山のしけみがすゑをみわたせば、これなん八幡山鳩の峯などふしおがみて、

江口ノ里ニ船ヲ停ム

石清水たえぬ流をくみてしる深きめぐみぞ代々に變らぬ

山崎、たから寺、田邊の里などうち詠め行に、江口の里といひて、ゑばし船をとゞめて、かなたこなたを詠めありきけるに、日もくれぬ、いにしへ西行法師この所にやどりせしと思ひ出られて、

長柄ニ著ク

惜みしもおしまぬ人も留らぬ假のやどりと一夜ねましを

夜明もてゆくほどに、長柄といふ所につきぬ、いにしへは、此所に橋ありて、人のゆきかよひしが、今ははしの跡とては、わづかに古くゐばかり也、まゝや、古きためしに人の引めるはとはりにぞ、

難波ノ浦ニ著ク

くち果し長柄の橋の長らへてけふに逢ぬる身ぞふりにける

やう〳〵難波の浦につきぬ、聞しよりは、みるはまされり、蘆やのさとみつの浦などいふ、よせくる波にをしやかもめの、水をもてあそびてたはぶるゝさま、いとおもしろし、

難波がたあしまの小船いとまなみ棹の雫に袖ぞ朽ぬる

みつの浦ヨリ船ニ乘ル

みつの浦より船に乘て、こゝかしこを見るに、

田簑ノ島ニ上ル

聞しより見るはまされりけふ社は初てみつの浦の夕なみ

たみのゝ島にあがりてみれば、あまの釣する船共、あまた岸のほとりにこぎよせてやすらひゐたり、つりのうけなは、ぬれたるあみを、木の枝にかけをきたるを見て、

雨ふれどふらねど乾くひまぞなき田簑の島の蜑のぬれ衣

野田ノ玉川ニ藤花ヲ觀ル

それより南にあたりて、野田の玉河と云所あり、このほとりに藤の花さきみだれたり、

紫の雲とやいはむ藤のはな野にも山にもはひぞかゝれる

四天王寺ニ立チ寄ル

是よりすみよしに詣でんとて、天王寺にたちより見れば、聖德太子四天王をゝさめをき給ふ、又みづからの御像をすへをき給ふ、石の鳥居、龜井の水など、心しづかにながめて、

萬代をかめ井の水に結びをきて行末長く我もたのまむ

住吉四社明神ヲ拜ス

それより住よしにまかりて、四社明神をおがみ奉りて、

四方の海深きちかひやひのもとの民もゆたかに住吉の神

一夜ヲ明シテ都ニ歸ル

この御神は、和歌の道に心ざしふかき人をよくまもらせ給ふと、むかしよりいひつたへ侍り、とに秀歌を好む人、この神にまいりて祈誓申せば、かならずその道にかなひけるとぞ、

神代より傳へつたふるしき島の道に心もうとくも有哉

濱べにくだりて、松の木陰にたちより見れば、まとに、鴈なきて菊の花さくと、在原中將が詠ぜしをおもひ出て、

住よしの岸によるてふしら浪のしらず昔を松にとふらん

はるかに海面をみれば、西は淡路島、須磨、明石の浦などいふ、船にてわたり見ばやなどおもへど、又世中の鉾楯により、人のをそれもいかゞなれば、一夜をあかし都にかへりぬ、

あはぢがた霞をわけて行舟のたよりもしらぬ波のうへ哉

須磨の浦をみれば、しほやくけぶりの立のぼるを見て、

立のぼるもしほの煙徒らにたが思ひよりくゆるならむ（る脫カ）

あかしのうらを見て、

よみをきしとの葉ばかり有明の月もあかしの浦の眞砂地

また御前にまいりて、いとま申して下向し侍りぬ、

みづがきのいく千代までもゆくすゑを守らせ給へ住吉の神

此一卷、所々のさまを筆にまかせて書しるし侍り、又時の興にもなるべきかとなり、

卯月上旬

鶴ちよどのへの

義詮判

○扶桑拾葉集所收本、此一卷以下ノ文無シ、又內閣文庫所藏ノ一本、本文異同少カラズ、

○義詮、住吉社ニ詣スルコト他ニ所見ナシ、本文亦諸本異同アリ、稍疑フベシト雖モ、姑ク之ヲ收ム、

貞和以來ノ御教書等炳焉

三寶院僧正坊雜掌、丹波篠村新八幡宮所領同國佐伯莊黑岡光久等ノ、社家ノ知行ヲ全ウセシメラレンコトヲ幕府ニ請フ、

〔三寶院文書〕五十四　〇山城

（端裏書）「三寶院僧正坊雜掌狀　貞治三　佐伯庄」

目安

三寶院僧正坊雜掌申丹波國黑岡光久等事

右兩所者、御寄進篠村新八幡宮之條、貞和以來度々御教書等炳焉也、案文進覽之、

隨而守護(于時名京兆)山、御遵行之間、社家管領無相違之處、故仁木大夫入道(義尹)、當國管領之時、無是非被違亂畢、而聊就有御立願、去康安元年八月十五日、重所有御寄進當社也、然早被經嚴蜜(密)御沙汰、兩度御寄附異于他之上、被仰當守護御□(方カ)、被沙汰付下地於雜掌、全社家知行、欲專神用、仍粗言上如件、

貞治三年四月　日

康安元年八月十五日重ネテ寄進セラル

五月(小甲子朔盡)

二日、乙丑、義詮、山城上山莊黑木ニ徙ル、

〔師守記〕(三十七帝國圖書館本)　五月二日、乙丑、天霽、(○中略)是日大樹上山莊黑木徙(移カ)移云々、

〔參考〕

〔師守記〕(四十七帝國圖書館本)　貞治六年七月十二日、丁亥、天晴、申剋西方雷鳴、(○中略)今夜於鎌倉前大納言(義詮)上山莊(菊亭殿地也、)招引申二條關白(良基)殿下云々、(○下略)

〔山城名勝志〕(二洛陽部一)　柳原第(今按、上立賣北室町有柳原所、或云、將軍第、柳原町口西有御所內所、是舊跡歟、)

三日、丙寅、義詮、山名氏冬ノ宿所ニ臨ム、

〔師守記〕(三十七帝國圖書館本)　五月三日、丙寅、天晴、(○中略)今日鎌倉(義詮)大納言、被渡山名中務(氏冬)大輔、、宿云々、

○山名氏冬ノ上洛スルコト、三月十六日ノ條ニ見ユ、

義詮、河野通盛ノ請ニ依リ、伊豫善應寺ヲ諸山ノ列ニ加フ、

〔善應寺文書〕(乾)　○伊豫

伊豫國善應寺事、任河野對馬入道(通盛)善惠申請旨、可爲諸山列之狀如件、

上山莊ハ菊亭殿ノ地

貞治三年五月三日　義詮御判

當寺長老

○河野通盛、伊豫西條莊内菊壹名、光明寺如來堂及ビ賀茂宮神田等ヲ、同國善應寺ニ寄スルコト、三月三日ノ條ニ、置文ヲ下シ、同寺住持職ヲ、士雲門徒ノ支配タラシムルコト、七月五日ノ條ニ、通盛ノ卒スルコト、十一月二十六日ノ條ニ見ユ、

五日、戊辰、北朝、大炊寮歩射ヲ停ム、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　五月五日、戊辰、天晴、○略中今日節供不及沙汰、依不具也、

今日内御方御節供無沙汰、兼日不及被仰寮家也、近年如此、

節供近年寮家ニ仰セラレズ寮中不具ニ依ル

今日大炊寮歩射被略之、寮中不具之故也、近年如然、○略中

是日記錄所召次行包、有末等、來申節供、家君被語仰予分、不及申寮、不具歟、

賀茂競馬、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　五月五日、戊辰、天晴、○略中今日賀茂競馬如例云々、深草祭同有之云々、

深草祭

六日、己巳、北朝、記錄所庭中及ビ雜訴沙汰ヲ延引ス、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　五月四日、丁卯、天陰、酉剋小雨灑則止、○略中今日召次有末、持參記錄所廻文、明後日可有庭中之上沙汰事云々、家君半領（申カ）狀、予故障之由載之、○略下（裏書）延引可爲十一日、各可被存知候、

四位大史　四位大外記（故障搆得者、可參仕候、）

刑部卿　大學頭

中大外記　大夫史

主税頭（故障候、）　掃部頭

博士大夫判官　大博士

大判事

右明後日（六日）、庭中式日之上、可有沙汰事、各如法辰一點、可被參記錄所之狀相廻（所カ）如件、

貞治三年五月四日

五日、戊辰、天晴、○略中今日掃部（中原師秀）頭送狀云、記錄所庭中明日可被行云々、可搆參

市邊稻ノ事

之由相存、冠沓可借賜云々、付使借遣了、
今日家君被遣狀於掃部頭許、是明日出仕之由承及、然者市邊御稻事、可有評
定、殊可被得其意之趣也、不具之間、雖不思定、參者可存知之旨、有返事、
六日、己巳、天晴、〇中略今日掃部頭返賜冠沓、今日記錄所庭中延引之由、開闔告
送云々、且延引之由、可被申御亭云々、今度沙汰之時、又可申請云々、勘付云、兩
種慥返賜了、庭中延引無念候、今度沙汰師守參仕大略不定候歟、後期可奉存
也、延引事、可傳達之趣也、
今日記錄所庭中并雜訴沙汰延引之由、頭宮內卿令申之、依被尋遣也、
十日、癸酉、天晴、〇中略今日召次有末來、記錄所庭中可爲明日云々、六日廻文載
端書了、可存知之旨答之了、
（頭書）今日以狀明日記錄所庭中延否事、被尋頭卿處、必定云々、
十一日、甲戌、天晴、今日午剋、家君著朝衣（花田扇、今年初度、）參記錄所給、依庭中也、先參
近衞前殿下（道嗣）給云々、大夫史量實、掃部頭師香、衣冠、今日沙汰延引之由、極蔕懷
國、來記錄所令申之間、著到之後、以極蔕進見參折紙云々、師香書見參云々、家
君自記錄所退出、次令向藤中納言（日野）時光卿宿所、有對面云々、師香同參向之云

市邊稻ノ事雜掌善覺空シク退出光忠ノ故障ニ依ル

見參折紙書樣

々、次令向權帥（萬里小路）仲房卿宿所、以子息藏人右中辨嗣房、被申奉云々、次參殿下給
云々、
今日市邊御稻、以一方可有沙汰之間、雜掌善覺參記錄所之處、空退出了、右衞
門督（細川）忠光、故障之間、延引云々、
（裏書）著到書樣
五月
十一日
師茂　量實　番、
師香

見參折紙書樣
記錄所
五月十一日見參、
師茂朝臣
量實

師香

七日、庚午義詮、鳳棲庵ヲシテ、若御前ノ祈禱ヲ爲サシム、

〔前田家所藏文書〕古蹟文徵三

若御前祈禱事、殊可令致精誠之狀如件、

貞治三年五月七日　　義詮花押

鳳棲庵

○義詮ノ男滿詮ノ生ル、コト、本月二十九日ノ條ニ見ユ、

八日、辛未御重厄御祈ノ爲メ、入道尊道親王、禁中ニ冥道供ヲ修シ給フ、

〔門葉記〕三十七　○山城　冥道供四

貞治三季五月八日、於禁中爲御重厄御祈、被修冥道供、三箇夜、堂上、

阿闍梨前座主尊道親王

助修六口

法印權大僧都桓增唱禮讃、奉行尋慶灑水、散供、桓惠灑水、散供、錫杖、長玄神供、燒帛、

權大僧都實什　宗圓

承仕四人

駈使

兼日沙汰ノ事

當日ノ事

雨儀開白

禪明　法乘　常智　禪龍

駈使八人　見丁二人

行事僧法印印祐

奉行職事　右中辨嗣房

一兼日沙汰事

重服者一七ヶ日、可止房中經廻事、

承仕駈使以下潔齋事、

結願之後、壇以下可燒上事、除門前机了、

一當日事

當日八日、曉天參仕、非參內之儀、直參候所了、尋慶法印等候車後了、自巳刻微雨降、風日來有限氣、未降雨、雲膚彌起、終日甚雨也、申刻壇以下支具等渡之、行事僧不參、於道場、奉行伴僧仰承仕等、堂莊嚴致沙汰、此間依召御前、陰氣及累日、隨而雨脚甚盛、雨儀開白有其例哉之由、被仰下之、先例仁治、寛元、祖師慈源僧正懃修、又貞和故宮現行等事申上之、雖非無先例、行法中雨脚無間斷者、燒帛以下不可心安、境節極而難治之由申入之、別雨脚聊令休止(前カ)

者、定珍重歟由申之、如今者、晴天更以不審由被仰下之、所詮、雖雨中、猶可始行由、於御前被仰定、又申定了、又道場所々漏滴、頗遺形也、俄被仰木工寮、指檜皮、有其沙汰、於事違亂、頗可謂障碍歟、但叡信太深、冥助有憑、退出後須臾可有道場御巡見之由、以六位懐國、被仰下之、堂莊嚴周備哉否、相尋奉行伴僧之處、悉整了云々、仍酉半剋有出御、右衞門督忠光、六位一兩供奉、道場御巡見、御信仰無比類、當所神標卽被染宸翰、御靈大明神衆云々、卽有御懐中、於道場被下之、直給之、不及傳奉行、寄南方机下立之了、懃標事、爲後宇多院勅筆之由申入之、今度當所神文被染御筆、爲希代之勝躅者歟、道儀揭焉、信心堅固之由、再三被仰之後、還御、右衞門督聊令申入之後、歸壇所了、此間伴僧等、參各々候所云々、雨脚猶無間斷而已、入夜了、

堂莊嚴整了

出御

宸翰ノ神標

正修ノ事

一正修事

戌半刻佛供等辨備之由奉行申之、然者忝可始御時由仰置了、戌斜伴僧皆參候由申案內、仍先行水此後便利食支禁之了、著淨衣、香平袈裟之時分、雨脚獲心之由、人々稱之、更非信交之限、卽入道場、桓惠法印扈從、外陣幕撥之、於居箱者、又出御々聽聞所云々、先到門前灑水用加持、兼而案脇左机了、內陣幕奉行伴僧尋慶法印撥之、著內金剛、裏無用之、著阿闍梨座、

大文、承仕二人參進、置香火退出、阿闍梨登禮版、禮佛等如常、塗香、次名香捻之、次加持香水灑淨、

此時所役助修二人立座、先於門前灑水、各用裏無、入道場、尋慶法印、取東方壇下灑水器灑之、東北机灑之了、桓惠法印、取南方壇下灑水器、南西灑也、各不取火垸、而後置器於本所各退下、

次前方便拍掌彈指用之、　次惣禮助修同禮之、

次表白在別、　神分祈願等如例、　供養文唱禮、

次五大願助修念誦如常、　粗註文不聞、　心經尊勝クラニ諸天等支配、

次入行法乃至振鈴、

次讀施主御祭文、草時親朝臣、清書行忠卿、編入荊玉集了、

次私記文　次々如先々、

五供養之時、打塗香器於火垸之時、唱禮師出諸天漢語勸請段了、鉢上段許突之、次供養段數反、此間敷花、役人二人、起座入內陣、今度不用門前灑水、尋慶法印、東北、桓惠法印、南西、各机ノ中間ニ蹲踞シテ用作法了、兩壇ッ、二人、所爲全同也、神供同

祭文荊玉集ニ編入

修之、長玄法印、起座降階下、於道場正面之庭上、向北修之云々、後聞、此間天忽
屬晴、月光星彩明存、其後彌晴天云々、
役人等歸座之後、止供養段、鉢突之、中段、即發遣段誦之了、鉢下段突之了、
次誦九條錫杖、
桓惠法印一人誦之了、無助音事、建保、寛元等例也、此間阿闍梨入三摩地、根
本印念誦法施等、心閑用之了、
次還珠法、
次五如來名號眞言等、微音唱之了、各三反、寶勝如來ヨリ、至妙色身如來名號、
幷眞言一反唱之、了又取返テ、已上三反唱之、多寶如來等ハ、一ツ、三反唱之
了、次第〳〵ニハヤクヒキ樣也、
次印明等後五供養、
打花鬘器之時、承仕四人入內陣、四方机幣帛以下拔之、內ヨリ端ヘ、大ヨリ
次第ニ拔之、一人承仕禪龍、秉指燭於庭上、長玄法師起座役也、了正面之ト
ホリ、庭ニテ向北燒之了云々、

九條錫杖
建保寛元等ノ例

出堂

次燒錢財文讀之、微音也、燒銀錢之間、具庭火讀之也、
次ム（今カ）夜所設等、十一行半、敎王房所加之也、此文聊指上テ讀之了、
次唱禮師出四智讚、三反誦之、音曲如大法ノ時、句一字モ不略之、
次後鈴、
次禮拜、主伴共禮之、起居禮也、先移香呂於脇机等、注則如常下禮版之後取之、於阿闍梨座上禮之、
次鐃一、即出迴向方便誦了、又鐃一、
次隨方迴向、取香呂、次鐃一、
次解界、火埡左轉、次奉送、彈指七反、每夜用之、
次禮佛三反、次出堂、
翌朝九日、被下天書云、
今日未終、依召參御前、先三品局、宰相典侍等對面了、即出御種々御雜談等、
酉刻退出了、此間恪勤□法師〳〵遇不慮之橫災、被召取侍所云々、仍即雖
遣使者於侍所、未及免除云々、戌初黙始御時、桓惠法印扈從如昨夜、今夜見
聞之輩濟々、尊玄僧正、密々來壇所了、泰恒法眼□泰□泰存等參、今日自江

常御所ニテ勸盃アリ御鞠アリ

州上洛了、忠季卿來壇所、聊以勸盃、

第三日、十日、天晴、

依召參御前、芝禪尼先出對、次被召常御所、聊有勸盃、女房一兩候御陪膳、申終有御鞠、於壇所可見物由被仰之間、壇所西ノ遣戸ニ、垂翠簾見物了、（此事又依御氣色也、）御鞠人數、（出御、中納言基隆卿、中納言忠光卿、宰相臣、永季、懷國、賀茂遠朝人也、）妙香（慈濟）院密々入來壇所了、爲今夜見聞也、戌下刻、始御時、毎事如昨日、卷數立壇左（ヽヽ）約行者、如常、法則如例、惣禮無之、結願作法又如常、後鈴之後禮拜、

結願

次金一、讀卷數如先、置脇机、又金一、

三ヶ夜之間、以下如常、神分等、（其詞如先々、在別、）

次五悔（台小博士、）次隨方迴向、

次佛布施、次解界、奉送、（彈指七反、如兩夜不用投花也、）

次下座禮佛、

出堂退出之時、指燭雲客有召、可參御前之由云々、先欲退出壇所處、秉指燭六位以下、進行常御所方之間、卽參御前、三ヶ夜無爲、天氣之陰晴、還表納受之告之由、及種々叡感了、爲法、爲門流、添眉目者也、須臾女房取御盃、置御前、已及曉更、忝可退出之由雖申之、暫可祗候之由、頻有仰、仍被下御盃、三獻之後、申暇罷出了、卽天明以前、密々自閑所退出白川坊了、

天書

翌朝被下天書云、

冥道供無爲結願、所願圓滿之兆、不被左右候、天氣每日消肝之處、臨期晴天還表奇特候、非御懃修者、不可催如此之信力、宿執之至誠、難得之不思儀（議）候、尙々惣別無爲、々悅不知所謝候也、兩三日連々述舊懷候條、又以爲本意候、昨日兩座亦非其興候、窮屈及今朝、頗悃然候哉（ヽヽ）候、尙々無爲返々悅入候也、

謹言、

二月十一日　　御判

木具以下燒上ノ事

一木具以下燒上事

一條高倉邊於閑地燒也云々、承仕駈使等奉行之、

一御祭文、（清書本納願文欄、草編入荊玉集了、）清書行忠卿、草時親朝臣、侍讀臣也、

清書ノ事

一表白事、入羯磨小櫍了、今度愚草了、

一御清書事

自來月八日、可被行冥道供、可有御懃修之由、天氣所候也、以此旨、可令洩啓
(入道尊道親王)
青蓮院宮給、仍執達如件、

四月廿九日　　右中辨嗣房

大納言法印御房

請文案

一請文案

自來八日、可被始行冥道供、可令懃修之由、謹承了、早可令存知之旨、青蓮院
宮御消息所候也、仍執達如件、

五月一日　　權大僧都尋慶

支度ノ事

一支度事

今度內々別而以五千匹分、可參懃之由、以女房奉書、再三被仰下旨、難默止
之間、領狀申入了、仍不及進支度、供料人供事、一向無沙汰者也、

佛供支配ノ事

一佛供支配事

支物下行注文ノ事

初日獄物但遣大籠云々、依無獄囚者也、
第二日非人、
第三日散所非人等云々、
是皆四方壇ノ五穀佛供也、於中壇佛者、承仕、駈使、行事僧、牛飼等、如小法
支配之云々、

一支物下行注文事

冥道供支物用途散用支貞治三年五月八日、

合五十貫文內

油	三貫九百文	八春日	百廿文
燈心	十文	壇敷五端	一貫五百文
銀錢紙	一貫文	幣白木	八百文
佛布施	五貫文	懸皮	四百文
釘	六十文	閼伽桶	卅文在杓、
閼伽折敷	五十文	散供折敷	廿一文

手洗桶　卅文在杓、　拭布　卅文

御坊　二貫八百文食浄衣ヲ除定、

以上十一貫二百五十六文

駈使方

米六石代　四貫六百十五文

麥三斗代　百文、和市三斗定

小麥三斗代　百八十文、和市一斗二升定

小豆三斗代　三百六十文、和市八升定

胡麻三掛代　六十文

散米四升五合代　卅四文

菓子　五十文

花　三十文

四方壇佛供三壇二升八合五夕代　廿二文和市一斗三升定、

以上五貫四百五十九文食浄衣可供歟、

駈使方

御疊　二貫五百文　大幕　六貫四百文

木具　五貫文　長横二合　一貫四百文

鼻繆　四百文　飯横二合　三百文

足桶　百文　様物　百卅文

ワサト　四十三文　裏無　百四十文

コモ　三百五十文　御手洗桶　卅文

御淨莚　卅五文　ツルヘ　十三文

ヒカキノ分　八百六十文　伴僧五口分　五貫文

宛料　一百文　女ス　三百文

御流物車力　百六十文　大粮　百卅五文

清夫衞直　二百四十八文

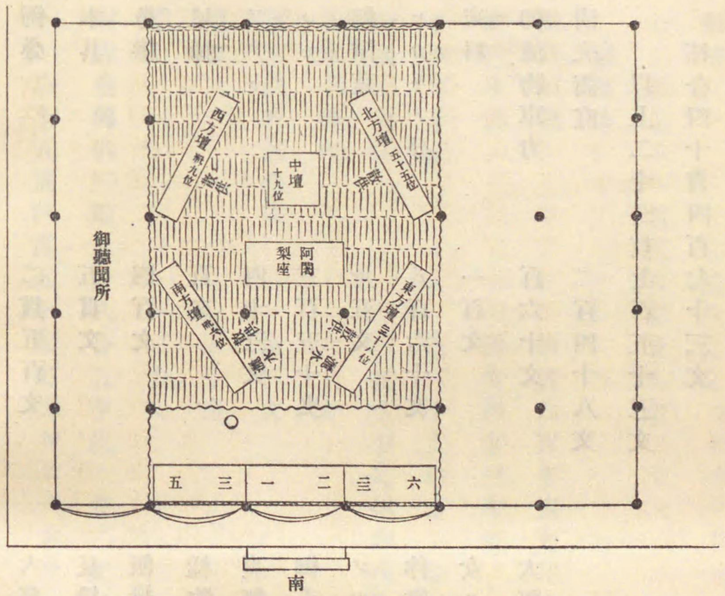
以上二十三貫七百五十五文

都合四十貫四百七十三文

右注進如件、

南朝正平十九年　北朝貞治三年五月八日

貞治三年五月十五日



禪判（脱アラン）

北山科稲傳馬料足三十文ヲ以テ沙汰ス

寮頭ノ膝突御幣等沙汰セズ

綸旨御教書度々ニ及ブ

供僧申狀

九日、壬申、今宮祭、

〔師守記〕○三十七帝國圖書館本　五月九日、壬申、天晴、今日紫野今宮祭也、北山科御稲傳馬、以析足三十文、致其沙汰、寮使友永請取之、南山科御稲傳馬、近年木幡彦三郎可致沙汰也、而免除年限中也、仍無沙汰也、寮頭膝突御幣等、不被沙汰進也、近年依不具如然、此祭近年諸司不及沙汰歟、然而傳馬ハ寮使請取之、近年儀也、

十一日、甲戌、是ヨリ先、北朝、東寺ヲシテ、國康ヲ同寺總大工職ニ補セシム、是日、長者光濟ヲシテ、重ネテ沙汰セシム、

〔東寺執行日記〕一　二月十九日、天晴、

惣大工國康事、綸旨、御教書等、及度々候之處、尚無敍用之由歎申候、何樣子細候哉、任御下知旨、可被遵行之由、可申旨候也、恐々謹言、

二月十七日　　權大僧都宗助

謹上　東寺執行（定淨）御房

此御教書今日到來、卽國康持參、

四月七日、

東寺大工職間事、供僧中事書如此、子細見狀候歟、忩可有申御沙汰之由、衆

議所候也、恐々謹言、

四月七日　　眞瑜

執行僧都御房

事書

國康總大工職相續ノ支證ヲ帶ビズ

國康ハ泉涌寺ノ平大工、一旦ノ勸進奉行ニシテ寺家ノ所職ニ補セラルルハ前代未聞

東寺申當寺惣大工職間事

右於寺家惣大工職者、國康更不帶根本相續支證之處、去暦應年中、泉涌寺大勸進奉行之時、任雅意、致無窮造(ヤ、)沙汰、號相傳、無是非書與惣大工職補任狀於國康泉涌寺平大工、之條、前代未聞之行事、不可說次第也、凡大勸進者、偏主造營方奉行之計也、何爲一旦勸進奉行之身、可計補寺家進止公人以下所職哉、當寺他寺未聞其例、且代々大勸進、更不及如此沙汰之處、始而貽非例之條、爲寺爲職太不可然、所詮、當寺番匠、鍛冶、大佛師、疊差職人等、爲長者進止、別當執行代々補任之條、往古流例也、而背寺家法度、致自由沙汰之上者、國康所帶勸進奉行補任狀等、更非御沙汰之限、然者早被經御奏聞、且被破大勸進非據之行事、且爲停止國康非分之競望、所及一寺之群訴也、不違先規之樣、欲被經御沙汰矣、

東寺惣大工職事、供僧中(由カ)狀幷事書如此、子細見狀候歟、可爲何樣哉之由、可有申御沙汰候、恐々謹言、

四月七日　　定伊

別當大僧都御房

五月廿四日、天晴、

當寺惣大工職事、可補國康之由、度々被仰下之處、寺家未下知云々、何樣子細哉、嚴密可令尋沙汰之由、內々被仰下候也、恐々謹言、

五月十一日　　仲房(萬里小路)

東寺長者僧正(光濟)御房

綸旨度々仰下サルトモ寺家下知セズ

長者御教書

國康惣大工職事、綸旨如此、急速可被遵行之由、其沙汰候也、恐々謹言、

五月廿二日　　權大僧都宗助

東寺執行僧都御房

追申、

此綸旨御一覽後、可被返進候、可被申御請候、今日可被返進之由仰候、

今日國康持參、

廿五日、天晴、以圓良綸旨返進了、事子細申入訖、

十二日、乙亥、北朝、前彈正少弼武田信明ヲ、陸奥守ト爲ス、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　五月廿三日、丙戌、天陰、降雨、未剋甚雨、申剋休、○中略今日宣旨到來、上卿中院（久我）中納言具通卿、一級之後、未著陣歟、武田前彈正少弼信明、任陸奥守事也、件信明從下敍日不分明之處、口宣載從四位上之由、迷惑無極者也、敍爵以下次第加級可尋職事也、○中略

上卿

從下ノ敍日不分明ナルニ從上トセルハ迷惑

口宣案

口宣一紙奉之、早可被下知之狀如件、

五月十二日　　權中納言（具通卿二合）

四位大外記局

貞治三年五月十二日　宣旨

從四位上源朝臣信明

宣任陸奥守、

藏人頭宮內卿平信兼奉

請文

不被出之、謹請

宣旨

自敍爵至從四下敍日、當局不存知、內記不注送之、

從四位上源朝臣信明　從四位上事、無子細之由、頭宮內卿申局務、五月十二日、被宣下云々、

前彈正少弼元關　宜任陸奥守、從五位上高師有卒後、

右宣旨、早可令下知之狀、謹所請如件、師茂誠恐謹言、

貞治三年五月廿三日　　大外記中原師茂狀

宣旨

從四位上源朝臣信明

從二位行權中納言源朝臣具通宣、奉勅、件人宜令任陸奥守者、

貞治三年五月廿三日　　大炊頭兼大外記下總守中原朝臣師茂奉

實乘院前大僧正桓豪寂ス、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　五月十二日、乙亥、天陰、○下略

後聞（頭書）、今日岡崎前大僧正恒豪入滅、年五十三、□有所勞、前天台座主也、

岡崎前大僧正

傳記　〔華頂要略〕百四十五　寶乘院　中絶諸門跡傳六　奉仕慈道尊圓兩親王　桓豪大僧正　法性寺座主、日吉別當護持僧、　洞院左大臣實泰

公猶子、中納言內家卿男、延文三年十二月廿九日補天台座主、康安元年十二月辭座主、

世系　〔尊卑分脈〕一藤原氏　北家　內家中納言、正二位、母公光卿女、

桓豪（山家）實乘院、岡崎、護持、桓守僧正資、大僧正、天台座主、爲左大臣實泰公猶子、

覺信（仁）相應院道意資、母、

歌什　〔新拾遺和歌集〕十七　釋教歌　前大僧正桓豪

の朝、申つゝとしける、

はさへをくおおし流のふりけをい又せたいれを谷川乃水

前大僧正桓豪

返し、

谷川のせゝまきた入し跡とめてたえぬおりれを今もうくらん

〔倭歌作者部類〕二　僧正　山、天台座主　桓豪　岡崎　新千載集二、

○北朝、桓豪ヲ天台座主ニ補スルコト、延文三年十二月二十九日ノ條ニ、同ジク桓豪ヲシテ、長日如意輪法ヲ修セシムルコト、同四年四月二十六日ノ條ニ見ユ、

十三日、丙子、是ヨリ先、北野社社僧等、口論又傷ニ及ブ、是日、同社別當慈守、罪名ヲ大判事明宗ニ問フ、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　五月九日、壬申、天晴、○下略

後（裏）聞、今日於北野社供花番社僧二人有喧嘩事、及傷一人社僧間、彼下手社僧諸人打止云々、以外事也云々、

十三日、丙子、天陰、降雨、午剋止、又降雨、申剋屬晴、○中略

供花番　御問條々

勘注條々　一北野社祠官承春與問（同カ）祐春、於夏堂（神殿西端造繕之、）成口論、祐春於當座、數箇所被疵、承春於東棟門外、爲他人被致害訖、且祐春被疵之刻、血散灑神殿之垂簾、大床以下、供花之神器云々、此條起自承春之所行之上者、其身雖令死亡、科條猶可及師匠親類哉云々、衞禁律云、闌入大社門者、徒一年、越垣者徒二年、中社小社遞減三等、神部不覺減二等、監神又減一等、闌謂不應入而入、古答云、大社者伊勢神宮也、大倭（倭）住吉、紀伊、出雲、賀形等之屬爲中社、自餘爲小社、鬪訟律云、鬪毆致人者絞、以及故致者斬、又條云、若亂毆

血散ジテ神殿ノ垂簾等ニ及ブ

傷、不知先後輕重、以謀首及初鬪者爲重罪、又條云、及傷徒二年、名例律云、當條雖有罪名、所爲重者、自從重者、

就斯等之文、訪科坐之法、及傷之根源、起於鬪亂歟、非謀殺之企哉、但謂其所者神殿也、溫彼輩者、爲祠官忘肅敬之禮、擁濫惡之情、忽於社壇、成鬪亂及及傷、令犯穢神殿以下神器之條、希代之惡行也、當條雖有罪名、所爲重者、自從重科斷歟、而於承春者、依此所犯、被殺戮之上者、其科難及師匠親類哉、是則謀反大逆之外、無緣坐法之故也、

一承春殺害下手人、雖未及露顯、尋沙汰之日、定不可有其隱歟、科條可爲何樣哉云々、捕亡令云、有盜賊、及被傷殺者、則告隨近官司坊里、聞告之處、率隨近兵及夫、從發處尋蹤登共追捕、捕亡律云、被人毆擊折傷以上、若盜及强奸、雖傍人皆得捕擊、以送官司、若餘犯不言請而輒捕擊者笞卅、殺傷人者、以故敘傷論本犯應死、而殺者遠流、名例律云、共犯罪以造意爲首、隨從者減一等、家人共犯止尊長、賊盜律云、造意雖不行、仍爲首者、

據考斯等文、承春惡行之科責、不可廻踵、尤令告知隨近坊里、且可經次第沙汰歟、而稱爲及傷人、群黨無是非於社頭咫尺、令敘害之條、亂吹之企、背憲章設科條歟、被尋決可被加所當之刑哉、

一同與黨人、亂入承春住坊科條、可爲何樣哉云々、賊盜律云、謀敘人者徒二年、擅興律云、擅發兵廿人以上、杖一百、五十人徒一年、五十人加一等、名例律云、共犯罪以造意爲首、隨從者減一等、若家人共犯止尊長、又條云、二罪以上俱發、以重者論者、

就斯等之文、法原亂入之造意、祐春被及傷之間、爲散彼阿黨及此企歟、擅發人兵令發向者、可謂謀殺之結搆哉、然者於造意輩者、不道二年之徒刑歟、隨從之族、減一等、可有科坐歟、

一承春入滅之在所、雖不分明、於棟門外鳥居內倒臥云々、推知、於此所息止歟、社內穢氣可爲何樣哉云々、式條云、隔墻別門處、雖同處不爲穢、一司有穢之時、餘司不爲穢者、

就之言之、隔墻之故也、且訪准據例、元亨三年六月一日、當社新經藏南面穢事、引隔注連搆、別路次取捨之間、守嘉承元年、承元三年勘例、不可爲穢之由、令勘奏之刻、被其趣於社家訖、加之寬喜二年六月十三日夜、於祇園社四足門前死人出來、雖爲鳥居內准路次、不可穢社頭、御靈會

穢氣如何

御行、去穢所、可被用他路次之由、先儒勘申訖、雖爲鳥居内棟門外也、難及社頭之穢哉、

以前條々、大概勘注如件、

貞治三年五月十三日　大判事兼明法博士左衞門大尉石見權介坂上大宿禰明宗

罪名後日注進ス

今日北野別當慈守僧正、去九日社頭喧嘩事、可注進罪名趣、仰大判事明宗之間、非寄檢非違使之間、□□難注進之旨令申處、再三被仰間、伺時議令注進旨、廿六日、於記錄所談申之、仍後日注進案、家君令乞給之間、予寫之、續注進候者也、

十五日、戊寅、北朝、遠江國司ニ令シテ、天龍寺領同國村櫛莊内ノ地ニ、大神宮役夫工米、御禊大嘗會等ノ勅役以下ノ課役ヲ免除シ、地頭職ヲ安堵セシム、

〔天龍寺重書目錄〕甲

一左辨官下遠江國、

應任傍例、免除伊勢太神宮役夫工米、御禊大嘗會以下敕役幷都鄙寺社所役、及國中段米關米、恆例臨時大小公役等、永爲天龍資聖禪寺領、當國村櫛庄地頭職事、

志玄ノ奏狀ニ依リテ敕免セラル

右得彼寺雜掌去月日奏狀�segment、於當寺領者、就前住志玄長老奏狀、敕免都鄙大小課役之條、去貞和五年七月六日、被下官符訖、爰於彼兩所之寺領者、觀應年中寄附之間、未蒙敕免、仍就非分所課、每度及對論之條、非無其煩、然者早任垂天慈、被成下官符宣、彌奉祝聖祚之安全者、國宣承知、依宣行之、

貞治三年五月十五日　大史小槻宿禰判

權右中辨藤原朝臣判

○齋藤利泰ノ妻尼性戒、亡夫ノ素意ニ任セ、天龍寺及ビ同寺塔頭雲居庵ニ、其遺領遠江村櫛莊地頭職三分ノ二ヲ寄スルコト、觀應二年五月十九日ノ條ニ見ユ、

義詮、祖通ヲシテ、眞如寺住持職ヲ執務セシム、

〔薩藩舊記〕前集二十　野田感應寺文書

眞如寺住持職事、任先例、可被執務之狀如件、

貞治三年五月十五日　源朝臣義滿（義カ）判

祖通西堂

勳功ノ賞

十六日、己卯、南朝、阿波小屋平右兵衛尉某ノ軍忠ヲ褒ス、

〔阿波國古文書〕三〇阿波

致忠節之由被聞食畢、尤以神妙、此時分殊抽軍忠候、宜遇褒賞者、天氣如此、悉之以狀、

正平十九年五月十六日　　勘解由（花押）

小屋平右兵衛尉（權カ）許

十八日、辛巳、足利直冬、安藝仁井野郷地頭職ヲ吉川虎熊ニ宛行フ、

〔吉川家什書〕十三虎熊丸御代

安藝國仁井野郷（今川孫五郎跡）地頭職事、爲勳功之賞所充行也、早任先例、可致沙汰之狀如件、

正平十九年五月十八日　　（足利直冬）（花押）

吉河虎熊殿

〔参考〕

○吉川實經、所領ヲ其子虎熊ニ讓ルコト、去年四月二十二日ノ條ニ見ユ、

近代此ノ事無シ

〔周防岩國吉川家譜〕一

實經

虎熊

正平年、屬足利直冬有戰功、被補安藝國仁井野郷地頭職、永和三年丁巳、屬今川伊豫守貞世、於九州有軍忠、狀別記之、

二十四日、丁亥、北朝妙音講、

〔師守記〕三十七帝國圖書館本　五月廿四日、丁亥、天晴、〇下略

今夜（頭巻）於禁裏被行妙音講云々、近代無此事歟、役人等可尋記、

二十六日、己丑、北朝記錄所庭中及ビ雜訴沙汰、

〔師守記〕三十七帝國圖書館本　五月十六日、己卯、天晴、霖雨過法之處、屬晴之條神妙也、

今朝雜訴沙汰幷記錄所庭中延否事、被尋頭卿之處、一定云々、仍市邊御稻事、被仰遣大判事明宗之處、今日沙汰延引、可爲廿一日之由奉了、若使者餘聞候哉、可搆參云々、仍又以狀重被尋頭卿之處、今日俄延引、可爲廿一日云々、爲之如何、先之市邊事、被仰開闔許之處、延引之由、明宗之上下部各違亂之間、參仕

市邊稻事沙汰延引二十一日ニ延引

廻文

不定云々、
後聞、今日大判事明宗參仕記錄所、召次有末持著到參之、而延引之間、退出云
々、
十八日、辛巳、天晴、○中略今朝召次有末持來記錄所廻文、來廿一日庭中之上、可
有沙汰事云々、家君半(申カ)領狀、予同前、
(裏書)延引可爲來廿六日(一カ)、各可被存知、
四位大史故障候、四位大外記故障搆得者、可參仕候、
刑部卿　大學頭
中大外記　大夫史奉
主税頭故障搆得者、可參仕候、掃部頭故障候、
博士大夫判官　大博士故障候、
大判事所勞扶得者、可參仕候、
右今日庭中延引、可爲來廿一日之上、可有沙汰事、各如法辰一點、可被參記
錄所之狀所廻如件、
貞治三年五月廿六(十カ)日

二十六日ニ延引

廿一日、甲申、天陰、雨下、時々休、今日記錄所庭中幷雜訴沙汰等、又延引、可爲廿
六日云々、
廿二日、乙酉、天陰、降雨、入夜聊休、今日召次有末持來記錄所廻文、元廻文載端
書、可爲來廿六日云々、可存知之旨答了、
廿六日、己丑、天晴、今朝家君、以使者今日雜訴沙汰幷記錄所庭中延否事、被尋
頭卿□(之カ)處、必定云々、又帥(仲房)卿、藤黃(時光)門等、出仕有無被尋之處、可出仕云々、仍予夏
袍自裝束師許取寄了、兼言朝臣口入之、不及損料沙汰也、
午斜家君著朝衣給、玉帶、花田扇、予著衣冠、上袴常扇、家君有予同車、參記錄所給、先之明
宗參仕、未敷座之間、懸尻雜談無程、開闔參仕、則敷座、仍面々著座、
寄人四位大外記家君、端座、束帶、大夫量(史脫カ)實、番開闔奥座、主税頭予衣冠奥座、量實次、大判事明宗
衣冠、端座、家君次、等著、(家脫カ)明宗直著到日次、自上首書名字、雜仕取副筆進之、次頭宮內卿
信兼朝臣來當所、著長押下、令申家君云、自今度沙汰剋限、眞實可爲辰一點、令
遲々者、不可有御沙汰之由被仰下、可被存知云々、尤可仰開闔歟、量實故被下
御敎書、可相觸衆等之由令申了、其後立座、
未剋傳奏權帥仲房卿、端座直衣、下袴、藤中納言時光卿、同、右衞門督忠光卿同、等著座、无

庭中一ケ條山城九條田地ノ事

南朝正平十九年　北朝貞治三年五月二十六日

出御、庭中一ヶ條、菩提院姫君雜掌申山城國九條田地事、不及奏聞、傳奏加問答被返了、明宗取目六了、目六付開闔、次書見參折紙、付開闔、〻〻以召次行包付頭卿信兼朝臣了、

著到書樣

廿六日

師茂　量實番、

師守　明宗番、

見參折紙書樣

見參折紙書樣

記錄所

五月廿六日見參、

師茂朝臣

量實番、

師守

明宗番、

長講堂領五條烏丸敷地ハ聖斷ヲ以テ及沙汰ニ及ルベカラザルバズ

今日被行雜訴沙汰、帥、藤黃門、右衞門督等也、職事頭宮內卿信兼朝臣一人參仕、〇下略

（頭書）今日庭中以前、明宗五條烏丸敷地事、爲長講堂寄檢非違（使カ）□□町拜領□本主稱賜安堵、可申庭中之由、奉長講堂御領事、不可爲聖斷之間、不可及御沙汰歟、可得御意云々、院宣面々見申之、

（裏書）記錄所

貞治三年五月廿六日庭中

可催促奉行菩提院姫君雜掌申山城國九條田地事

著座

大宰權帥

藤中納言

右衞門督

長講堂領安堵ノ院宣

長講堂領五條烏丸敷地、如元可被奉行者、院宣如此、悉之以狀、

貞治三年十二月十七日　勸修寺一品經顯判

南朝正平十九年　北朝貞治三年五月二十六日

大判事硯下

□□□御教書到來記錄所、仍不及被進請文也、

二十七日、庚寅、北朝、藏人右少辨勘解由小路仲光ヲシテ、延曆寺六月會ニ參向セシム、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　五月廿七日、庚寅、天晴、朝間聊陰、○下略

今日藏人右少辨藤原□光、向延曆寺、六月會云々、

義詮、山城恩德院ヲシテ、天下靜謐ヲ祈ラシム、

〔大通寺文書〕○一山城

天下靜謐御祈禱事、近日殊可致精誠之狀如件、

貞治三年五月廿七日

恩德院長老

（附箋）「寶篋院殿義詮」（花押）

〔參考〕

〔山城名勝志〕五洛陽部四　恩德院或京程圖、在八條北室町東、顯隆堂、金色堂、恩德院等、藏于一所、

曉筆記云、洛陽西洞院恩德院と申侍る寺い、花山院殿の御寺とかや、應仁の大亂の內、花山院殿の室かくれ給ひしに、みたれの內の事なれい、御死骸を忍ひて、恩德院へうつされし、今按、遍照心院塔頭有恩德院、至于後世而遷之乎、

遍照心院ノ塔頭

二十八日、辛卯、北朝、左近衛權中將西大路隆仲ニ禁色ヲ聽ス、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　六月十七日、己酉、天晴、○下略

今日頭中將□（隆）□（仲）朝臣禁色宣旨到來、上卿花山院大納言兼定卿、則成宣旨被遣文殿許、忍可付由被下知了、宣旨等注裏、

口宣一枚

右奉入如件、

六月二日權大納言二合

奉中大外記局

貞治三年五月廿八日　宣旨

藏人頭從四位上行左近衛權中將藤原朝臣隆仲

宜聽著禁色、

藏人右中辨藤原嗣房奉

不被出之、

請文

跪請

宣旨

藏人頭從四位上行左近衛權中將藤原朝臣隆仲

宣聽著禁色、

右宣旨、早可令下知之狀跪所請如件、師茂誠恐頓首謹言、

貞治三年六月十七日　大外記中原師茂狀

宣旨

藏人頭從四位上行左近衛權中將藤原朝臣隆仲

正二位行權大納言藤原朝臣兼定宣、奉勅、件人宜令聽著禁色者、

貞治三年六月十七日　大炊頭兼大外記下總守中原朝臣師茂奉

宣旨一通被遣之、忿付進可被申散狀之狀、依仰執進如件、

六月十七日　延兼上

外記文殿

○隆仲ノ藏人頭ニ補セラルヽコト、四月十四日ノ條ニ見ユ、

中古以來ノ例ヲ注進スベシ

奉行月輪家尹ノ書狀

師茂ノ注進狀

關白二條良基、中原師茂ニ令シテ、春日社造國司ノ事ヲ錄上セシム、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　五月廿八日、辛卯、天陰、午一點以後雨下、終日不休、入夜甚雨、子剋以後止、○中略今日自殿(良基)下、爲月輪中將家尹朝臣奉行、被尋問家君云、春日社造國司自中古可被注進候、付廻可被進之由、內々被仰下云々、引勘可注進之由、以詞被申了、○下略

□(廿)九日、壬辰、天晴、酉半剋、西方雷鳴、兩三度聞、小雨間灑、則止、

今日春日社造國司以下事、被注進殿下、昨日被尋下之故也、來取之間、付御使被注進了、○中略

春日社造國司交名、自中古可被注進候、猶、付廻可被注進之由、內々被仰下候也、恐々謹言、

五月廿八日　家尹

四位大外記殿

春日社造國司以下事、隨所見注進別紙候、可有御進入候哉、此事專官可存知歟、可被得其御意給候哉、師茂誠恐謹言、

五月□(廿)九日　師茂狀

春日社造國司以下事

弘安十年六月廿九日、春日社上棟也、

弘安十年

十一月廿七日、被勘同社遷宮日時、

件度、雖被勘日時、遷宮日外記々無所見、

造國司信濃守藤原親世

信濃守藤原親世造進之、(左少辨藤雅知行、)

永仁六年二月九日、春日社木作、幷假殿遷宮日時定也、

永仁六年

四月一日、被勘同社上棟幷遷宮日時、

十二月六日、被改勘同社上棟遷宮日時、

造國司佐渡守藤原經茂

廿九日、同社遷宮也、右中辨藤原雅俊朝臣、右大史中原俊幸以下參向社頭

云々、

件度、佐渡守藤原經茂造進之、(藤宰相雅卿知行、)

元應二年

元應二年三月八日、春日社假殿遷宮定也、

十一月廿五日、被勘造春日社雜事日時、

十二月廿四日、被勘同社遷宮日時、

造國司無シ

廿六日、同社正遷宮、

件度、造國司無所見、

康永二年

康永二年八月廿日、春日社假殿遷宮日時定也、

九月二日、同社假殿遷宮也、

十二月四日、被行同社立柱上棟日時定、

九日、被改勘同社立柱上棟日時、

廿六日、被勘同社遷宮日時、

廿八日、同社遷宮也、左中辨藤原宗光朝臣、右大史高橋景職以下、下向社頭

云々、

造國司河內守藤原隆鄕

件度、河內守藤原隆鄕朝臣造進之、(別當隆蔭卿知行、)

○春日社、社殿ノ造營ヲ、北朝ニ請フコト、貞治元年五月三日ノ條ニ、同

社神人等、神木ヲ奉ジテ入京シ、社頭ノ造替ヲ北朝ニ請フコト、本年十

二月二十日ノ條ニ、北朝、春日社造營ノ棟別錢ヲ、諸國ニ課スルコト、明

年二月五日ノ條ニ、遷宮ヲ行フコト、同六年十二月二十八日ノ條ニ見

ユ、

母ハ通清法印ノ女
産所門四條坊門朱雀中條兵庫入道宿所ノ諸大名ヲ召テ馬獻ヲ賀ス
平産ニ馬ヲ引キ諸社ニ進ムル

二十九日、壬辰、義詮ノ男（滿詮）生ル、

〔師守記〕（三十七）○帝國圖書館本　五月廿九日、壬辰、天晴、○（中略）今夕酉剋鎌倉大納言妾物一對（通清法印息女、）平産、（男子云々、）産所四條坊門朱雀中條兵庫入道宿所也、諸大名引進馬以下云々、

〔東寺執行日記〕一　六月一日、天晴、昨日（廿九日、酉剋、）將軍一臺産生男子云々、諸大名各牽進馬云々、仍諸社被牽進之云々、而於當寺鎮守者、無其沙汰之條、言語道斷事也、

〔參考〕

〔尊卑分脈〕（清和源氏足利）

義詮

滿詮（權大納言、從二位、左兵衛督、左馬頭、號養德院、新續古作者、應永廿五五十四薨、）

〔薩戒記〕應永廿五年五月十四日、今朝入道權大納言源朝臣滿詮（內大臣殿叔父、）薨去、（年五十五、）諸人惜之如父、可葬等持院云々、

是月、堺人道祐、論語集解十卷ヲ刻ス、

〔論語集解〕○（十宮內省圖書寮所藏）

日下逸人貫ノ書
道祐居士
三條西實隆勝仁親王ヨリ拜受ス
朱墨ノ點ヲ加ヘシ本

（卷末）堺浦道祐居士、重新命工鏤梓、

正平（甲辰）五月吉日謹誌、

（卷末）論語卷第十（經一千二百二十三字、注一千一百七十五字、）

學古神德（僧）措法日下逸人貫書、

〔論語集解〕○（十岩崎文庫所藏）

（卷末）堺浦道祐居士、重新命工鏤梓、

正平（甲辰）五月吉日謹誌、

論語卷第十（經一千二百二十三字、注一千一百七十五字、）

（奥卷）長享第三曆林鐘十八日、儲皇（勝仁親王）竹園賜之、可祕々々、

亞相拾遺郎（花押）（三條西實隆）

此一部訪大外記師富朝臣之訓說、幷見合清家之本、寫朱墨之點、加隨分之琢磨者也、後昆可祕々々、（○本書第三卷ニ、同文ノ奥書アリ、）

〔論語集解〕○（十宮內省圖書寮所藏）

（卷末）堺浦道祐居士、重新命工鏤梓、

正平（甲辰）五月吉日謹誌、

論語卷第十（經一千二百二十三字、注一千一百七十五字、）

（奥書）學古神德楷法日下逸人貫書、

（奥書）（朱書）于時應安辛亥季秋也、

（清原枝賢加點ノ本）因故人祝上人之命、外記朱墨親磨加點、本在于洛陽惠阜（嵩日山）之內之光明禪院、然予亦寫之、一覽輩者改之、多幸々々、

（祝上人ノ命ニ依リ外記加點ノ本）于時明應七戊午暮春下澣日

〔論語集解〕○十岩崎文庫所藏

（卷末）論語卷第十（經一千二百二十三字、注一千一百七十五字、）

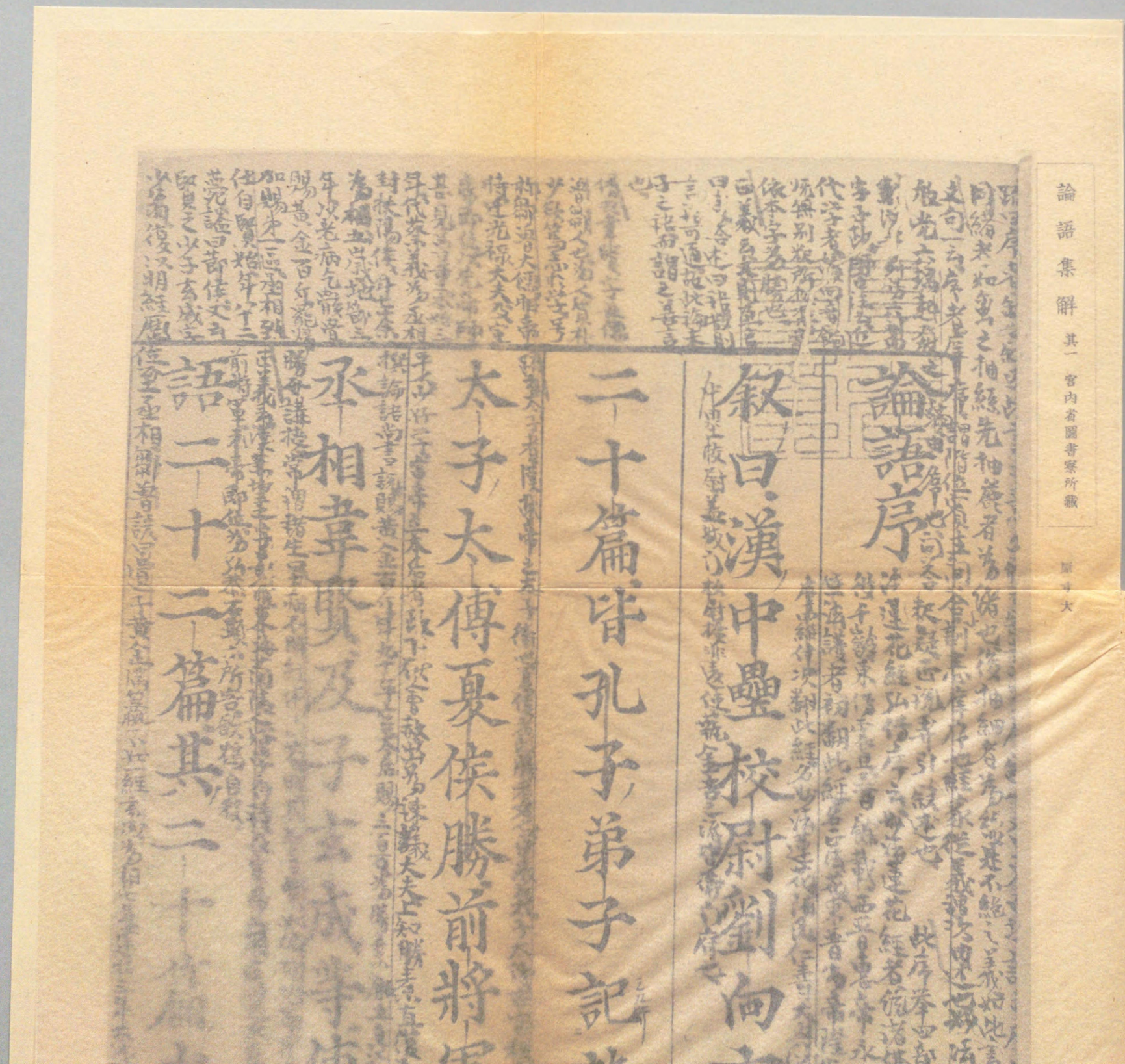
（奥書）右魯論者人倫之大用也、時習可也、玩索而覺氣味深長者乎、干爰不干翁專佛教餘、志儒術、求累家祕點、不及猶豫、拭澁眼、染禿筆、加朱墨、爲他人勿令容易而已、

元龜第二歲舍辛春二月初日　宮內卿清原朝臣（枝賢）（花押）（印）

〔論語集解〕○十宮內省圖書寮所藏

（卷末）論語卷第十（經一千二百二十三字、注一千一百七十五字、）

（奥書）右以清家祕本、加朱墨兩點訖、尤可祕之而已、（中原康雄加點ノ本）



論語集解　其一　宮内省圖書寮所藏

原寸大

〔論語集解〕○十（巻末）論語卷第十（巻末）注經一千二百二十三一千一百七十五　岩崎文庫所藏

（奥巻）右魯論者人倫之大用也、時習可敎餘、志儒術、求累家祕點、不及猶已、

元龜第二歲舍辛春二　清原枝賢加點ノ本

〔論語集解〕○十（巻末）論語卷第十（巻末）注經一千二百二十三一千一百七十五　宮内省圖書寮所藏

（奥巻）右以清家祕本、加朱墨兩點訖、尤　中原康雄加點ノ本

中原康雄加點ノ本

右以清家祕本、加朱墨兩點記之、尤可祕之而已、

論語序

皇校尉劉向言魯論語

十篇孔子弟子記諸善言也

子太傅夏侯勝說軍蕭望之

相韋賢及子玄成等傳之齊論

二十篇其二十章句頗

論語集解　其一　宮内省圖書寮所藏

原寸大

論語序

叙曰漢中壘校尉劉向校

二十篇皆孔子弟子記

太子太傅夏侯勝前將軍

丞相韋賢及子玄成等傳

五十二篇其二十篇皆

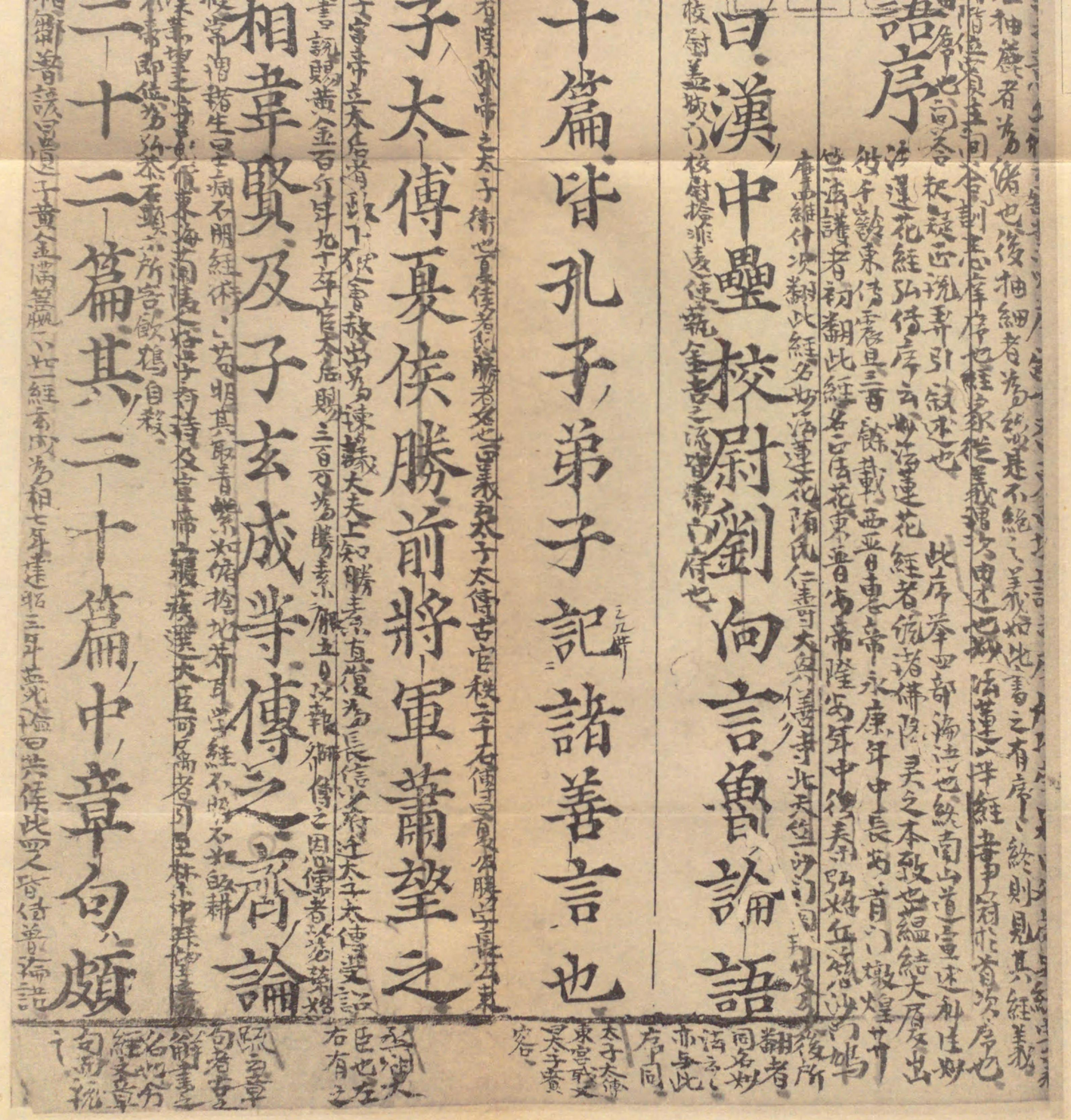
論語卷第十　注一千二百二十三　一千一百七十五

右以清家秘本加朱墨兩點記尤

中原氏論語加點ノ本

宮内庁書陵部所藏

原寸大



論語序

汝南袁氏傳序云妙法蓮花經弘傳序云妙法蓮花經者[illegible]

此序舉四部海注也然南山道宣述科注妙法蓮花經弘傳序云妙法蓮花經者[illegible]

[illegible]

[illegible]

孔安國曰命謂窮達之分也不知命無以立也不知人也則無以知人也

不知命無以立

不知言無以知人也

論語卷第一

經一千二百二十三字

注一千一百七十五字

興古神德指法

論語始末圖

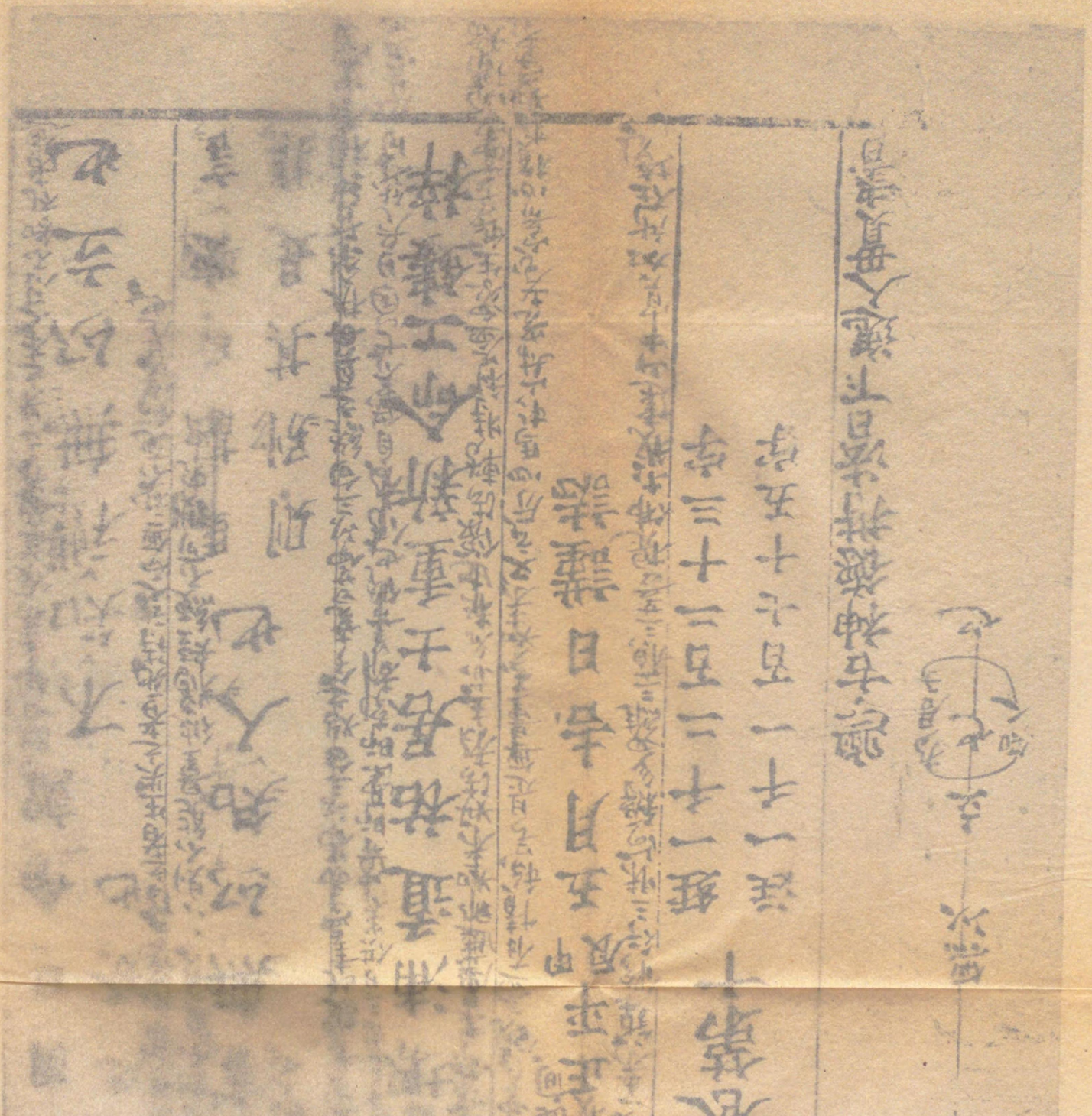
不亦樂乎

悅

君子

無以立

為君子知人也



論語集解 其二 宮内省圖書寮所藏
原寸大

孔安國曰、命謂所受天性也、不知天神無以立其身也、故君子以得立其身也、故孔子曰、不知天命無以立也、不知者生失之者死、時人之所無、孔子以不知天命無以立

宮内庁書陵部
原寸大

國曰、命謂照曰社主奉俟並敬為立身之本人豈不知礼者乎

之分也

不知禮無以立也

無以立

為君子知人也

言無以知人也

則別其是非

聽言

聽言

卷第十

經一千二百二十三字

注一千一百七十五字

堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平甲辰五月吉日謹誌

與古神德揩法日下邈人貫達書

孔安國曰命謂窮達之分也

不知禮無以立也

不知言無以知人也

則也

堺浦道祐居士重新

正平甲寅五月吉日謹誌

論語卷第十 經一千二百二十三 注一千一百七十五

安國曰分謂達之分也

不知禮無以立也

知言無以知人也 [illegible]聽曰聽言則別其是非

堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平甲辰五月吉日謹誌

詩卷第十 經一千二百二十三字 注一千一百七十五字

孔安國曰命謂窮達之分也

不知言無以知人也 馬曰則

也

堺浦道祐居士重新

正平甲辰五月吉日謹誌

論語卷第十 經一千二百二十三 注一千一百七十五

論語集解 岩崎文庫所藏
原寸大

安國曰命謂達之分也不知禮無以立也

知言無以知人也

則別其是非

堺浦道祐居士重新命工鏤梓

正平甲辰五月吉日謹誌

論語卷第十　經一千二百二十三字
注一千一百七十五字

孔安國曰命謂窮達之分也

不知禮無以立也馬融曰言無以知人也則別也

論語卷第一

經一千二百二十三字
注一千一百七十五字

國之命謂不知禮無以立也

公言不知人也馬融曰聽言則知人也

經一千二百二十三字

注一千一百七十五字

卷第十

論語集解
岩崎文庫所藏
原寸大

孔安國曰命謂窮達之分也

不知禮無以立也

不知言無以知人也

馬融則別也

論語卷第十

經一千二百二十三字
注一千一百七十五字

國曰命謂之分也不知禮無以立也

言無以知人也馬融曰聽言則別其是非

卷第十　經一千二百二十三字
注一千一百七十五字

所藏
原寸大

正平論語最モ純古

于時元龜第二林鐘下旬　外史(中原)康雄(花押)

○論語集解ノ刻記ニ、堺浦道祐居士、重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹誌、學古神德揩法日下逸人貫書トアルモノ、學古神德日下逸人貫書ノ十字ナキモノ、全然刻記ノナキモノ等アリ、ソノ刻ノ前後ニ關シテ諸說アリ、今姑ク玆ニ之ヲ竝擧ス、

〔正平本論語札記〕○三村清三郎氏所藏

昔者、皇國通信於隋唐、所傳經籍、皆是當日使臣所齎、而歷世久遠、漸就淪壞、幸而所存、如五經論孟皇侃論語義疏是也、就中刊本所傳、正平論語、最爲純古、較之羣書治要、唐石經、頗有同異、間與蔡邕石經殘碑史漢說文所引合、又多與陸德明釋文所引十本合、則其爲六朝之遺經、而非唐本、亦可知也、今世所行、一二刻本、及邢氏注疏本、淺人妄校、失眞、終未有得其善者、光彥深懼此本之遂亡、爰用所藏本、覆刻以餉同好、其中字體訛謬、缺文壞字、間亦有之、思而可得者、竝依其舊、不敢改正、所以存古而懲妄也、

此書卷末跋云、堺浦道祐居士重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹誌、謹案、正平甲辰、寔爲後村上天皇正平十九年、○中略此書之刻、距今僅四百五十餘年、其南朝正平十九年　北朝貞治三年五月是月

三種アリ
有跋本
無跋本

無跋本ハ後出ノモノナルコトヒナシト疑ナ

所刷印、流傳希少、好古之家、適藏弆焉、光彥所嘗見、猶有三種、一則有跋本、今所刻是也、一則無跋本、後人削去跋文者、合而校之、界欄字形、皆是一樣、蓋同本也、吉田學生、誤以無跋本爲正平原本、其所輯論語攷異稱舊板大字本者是也、然無跋本印板殘缺、尙存于世、跋二行削去之痕隱然、則知無跋本爲後出無疑也、又據跋所謂重新命工鏤梓、則正平猶有原本與、然今竟不可復求也、一則卷尾有學古神德楷法日下逸人貫書十二字、學古神德楷法未知其爲何義、蓋日下其姓、貫其名也、此卽影正平本者、亦所希見也、○中略

釋文序錄何晏集解十卷、隋書經籍志集解論語十卷、何晏集、新舊唐書藝文志、何晏集解十卷、卷數竝皇國所傳古本同、又鄭樵通志、王應麟玉海、晁公武郡齋讀書志、陳振孫書錄解題、竝載論語集解十卷、則知宋時單注本尙行矣、晁氏曰、昔議者謂太和石本、授寫非精、時人弗之許、而世以長興板本爲便、國初遂頒布天下、收向日民間寫本不用、然有舛誤無由參校判知其謬、猶以爲官旣刊定、難以獨改、由是而觀、石經固脫錯、而監本亦難盡從、據此則宋時所行、唯有長興本一派耳、邢昺作正義、朱氏作集注、亦皆由此本、而無別本可用校讎、朱氏纔引晁氏所錄蜀石經、及福州寫本、亦何寥寥、若夫四庫全書、則以萬乘之力、而聚四海之書、宜無所不有、然觀其所錄、纔不過論語正義二十卷、如皇侃義疏、亦吾書之所流傳耳、恭惟、皇國質素成風、古訓是由、守而不失、眞本永傳、可不謂盛德矣哉、

古本論語數通アリ
菅家鈔本
宗重卿鈔本

明應印本
大永鈔本

天文印本
皇疏印本
古鈔本

六朝俗訛ノ字樣ヲ用フ

世所傳古本論語猶有數通、如菅家鈔本、此本舊大和國廣瀨村里正某所藏、相傳菅原丞相眞蹟、廣瀨屬于安濃津封內、今爲侯家珍藏、每卷有貞和二年記、吉田漢宣云、粘表時所題、蓋八九百年古鈔、宗重卿鈔本、每卷首題云、左中將藤宗重、案、宗重御堂關白道長公十二世之裔、任中納言、敘從二位、父曰冬定、貞治六年十二月薨、今松木家之遠祖、又卷末有貞和二年及應永九年記、亦後人所題、蓋五六百年外古鈔、友人湯島狩谷卿雲藏、攷異未載之、所明應印本、卷末記云、明應龍集己未仲秋、平武道重刊、攷異未載之、大永鈔本、卷末記云、于時大永四年月中澣、攷異所引、天文印本、卷首有從三位侍從藤原宣賢敘、皇疏印本、寬延中根三位所刻、及古鈔本、慶長以上古鈔、光彥藏弆、是也、先是、山井君彝作攷文、吉田學生作攷異、古本同異、班班可攷、故今節錄涉文義、資攷證者若干條、以爲札記一卷、附刻以備參、二書所載、竝從省略、此書每用六朝俗訛字樣、如互作牙、弊作弊、罔作冈之類、玉篇廣韻五經文字干祿字書等所載、可以證六朝本也、然不勝其繁、今亦不盡釋之、但可資攷證者札記之、又有一種奇異俗字、如鄭作郑、又作郐、後作後、又作後、融作融、敢作敢、化作伀、苞作苞、引作引、說作說、疑作疑、謚作謚、輥作輥、軏作軏、般作般、穆作穆、遷作遷、質作質、攝作攝、發作發、誣作誣、怨作怨、雖作雖、務作務、遜作遜、毀作毀、旣作既、冕作冕、又作冕、又作覓、就作就、聘作聘、浴作浴、況作況、達作達、羞作羞、齒作齒、闕作

明應八年西周平武道正平本ヲ覆刻ス

清原宣賢朱墨ヲ加フ

闕、黨作黨、矢作矣、慧作慧、桀作桀、繼作繼之類、諸字書所無、不可攷者、然此間古金石古鈔舊板本、往往用此等字、顧六朝唐人俗間字樣、皆成此體、邦人沿承用之、光彦學淺聞狹、亦無由辨究、乃缺疑以待來哲、文化十年癸酉冬十月、江戸市野光彦識、〇下略

〔參考〕

〔論語集解〕〇十伊藤孝彦氏所藏

（卷末）今茲一書、夫子之遺言、而漢朝諸儒所註解也、寔是五經之輔轄、六藝之喉衿也、天下爲民生者、豈不仰其德矣哉、

明應龍（八年）集己未穐良日　西周平　武道敬重刊

論語卷第十　經一千二百二十三字、注一千一百七十五字、

（奥書）永正九年正月十五日、以累家祕本書寫之、卽加朱墨訖、

少納言清原（宣賢）朝臣判

文字增減年來不審、以數多家本雖令校合、共以不一揆、爰唐本不慮感得之間、卽校正之處、相違非一、但古本之躰、令非可改易、仍脇注之兩存焉、就家說於無害之文字者、以朱消之、是又非臆說、黃表紙家本如此、後來以此本可爲證者乎、

林恕ノ奥書　林信勝嫡孫慤ニ授クル

吉田漢宦ノ所見

永正十七年九月廿三日　給事中清原宣賢

享保十六年辛亥八月伊藤長胤藏書

〔論語集解〕〇十內閣文庫所藏

（卷末）堺浦道祐居士、重新命工鏤梓、

正平甲辰五月吉日謹誌、

論語卷第十　經一千二百二十三字、注一千一百七十五字、

（奥書）論語何晏集解五冊、顯考文敏（林信勝）先生幼歲所誦古本、家藏可六十年、至慶安三年庚寅、慤（隱嗣）也八歲、習大學句讀了、時先生手自把此本授之、慤受讀而珍襲之十有七年、編帙既舊、盉魚稍食、此書尾曰、正平甲辰鏤梓、則是歷三百年、所其損壞、不可恠焉、方今修補裝背新成、如其標書則存舊題也、昔聞遺硯傳其孫、唯此文房一具、猶不忘其芳潤、況於二十篇聖言乎、遺言而傳者、猶墮追憶之淚、況於手自授之乎、且其授附之心、豈其翅乎哉、慤也念茲在茲、則覩乃祖于此書乎、不可忽諸、寬文丙午夏之仲月之下弦日之念三、弘文學士院林子、爲嫡男慤書卷尾、以爲他後之證、印　印

〔活版經籍考〕甲部　是よりさき、南朝の正平中に、和泉州堺浦の道祐居士

といふもの、論語集解を刻せり、其本中華へも傳へ至りて、清の錢曾が讀書敏求記にも載せし、其末に、堺浦道祐居士、重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹誌と題す、其本字畫行欵、第二卷に記せし六行絲欄大字の活版本と分毫を差へず、これによるに、道祐自ら跋して重梓とす、知るべしこの活版本は、道祐が原本たることを、かくのごとくむば、室町氏の世より猶ささだちて起れりといふべし、もしくは北條氏の時、北條顯時等がことき學を好み、武州金澤の地に書院開建し、經師を延て業を講し、文庫を造置して、廣く四部の籍を儲へ藏めし等の擧に出でたるもしるべからず、この活版の論語殊に多く關左の地に存せるをもて知るべし、それを後に道祐が泉南に重鐫せし處なりやとおもへり、されども確證の徵とすべきを得ず、たゞこの活版の正平本の原たることは、疑べくもあらざれば、時をもて考ふるに、北條氏の時に出たるは違べからず、〇上略下

道祐ノ用ヒシ原本ハ六行大字ノ活版ナリト説

活版ノ論語多クノ關左ノ地ニ存ス

狩谷望之ノ所見

卿雲按、讀書敏求記に載せたる所は、正平板を顯寫せる者と見えたり、行高麗鈔本とも、又居然東國舊鈔とも有て、版本本（行カ）とは見わず、卿雲按、六行大字本の論語は、整板にして活字に非ず、且此本を以て正平板の原板と

六行大字本ハ正平版ノ原版ニアラズ

するは、大に非也、後に正平板の顯名を削去して印出したる者也、板今傳在日本橋書肆千鐘房、就撿削去顯名之鑿跟現然可見矣、

〔論語集解攷異〕〇一内閣文庫所藏　聚珍版刷印舊本論語集解幷攷異提要

玆所刷印之本、就舊本中、以國初舊版本爲主、一遵原刻、不敢改經注一字、舊版本有活版、整版二種、竝慶長中刻、七經考文所稱謂足利學本者也、然二本有跋署可徵云、慶長年慈眼正運刊于洛汭、考文所稱未知何據、亦有無跋者、全同此本、世多有之、因以爲主、參校以七通古本、洎開成石經皇侃陸德明邢昺、其七通古本者、卷子古鈔本、舊版大字本、大永鈔本、永祿鈔本、清原宣賢本、國訓本、伊氏本是也、卷子本者、出大和州世農家、赤紙標黝漆軸、古樸之極、書蹤精絕、傳云、菅公道眞親筆、然無跋署可據、唯有貞和二年粘表時題字、蓋八九百年前古書、生平所見論語之爲最古、舊版大字本者、漢宣、藏弆、卽正平道祐本也、唯無年號題名爲異、或云、版後歷鐫去者、或據道祐重梓字、以無題名者爲原本、有題者爲翻雕、未詳孰是、其版則全同、猶如定武蘭亭五字損不損之類、其有題本、遵王所獲者也、無題本、足利學亦藏之、考文所引古本者、蓋指此、是本世亦儘有焉、〇上略下

七種ノ古本

舊版大字本ニ年號題名ナキヲ異トス

無題ノモノハ原本

有題ノモノハ翻彫ナリトノ説

〔經籍訪古志〕二　論語集解十卷正平甲辰刻本

海保元備ノ所見　正平ノ跋文ヲ刪リ去ル　版木日本橋千鐘房ニ藏ス

跋云、堺浦道祐居士、重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹誌、〇中略又有影刻、此本者、跋云、學古神德楷法日下逸人貫書、此本藏在屋代弘賢所、又有一本、刪去正平跋文者、版今尙藏在日本橋書肆千鐘房、又有明應板本、亦模刻此本者、刪去正平跋文、換以明應己未西周平武道敬重刊記、

屋代弘賢ノ所見

〔論語集解〕〇十岩崎文庫所藏

（與考）我邦刊行論語、蓋權輿于正平乎、而其本不多傳于世矣、嘗見春齋（林恕）先生遺書於弘文院庫中、其中有正平本論語、又聞之日下部勝皋先生之言、浪華木村孔恭亦藏一本、蓋余所聞見僅二本而已、其他一本流傳乎朝鮮、見淸錢曾遵王讀書敏求記、遵王以其轉寫本、與時行本校讐審定、稱集解原本、客歲祇役於京師、官事餘暇閱市、適購獲此冊、愛玩不措、而書末所題道祐、不知其何人、頃讀泉州志、大鳥郡有西本願寺別院、傳云、道祐草創之、道祐足利左馬頭義氏朝臣第四子、名祐氏、幼喪父、而與母來居焉、歸釋改名道祐矣、及等持院贈太政大臣、拜將軍、免稅寄戶、曆應中、覺如上人、附屬佛像聖敎、則其所謂道祐乃源祐氏之法名、無可疑者矣、向謂、此書題重新命工、則先是有刊行者、道祐重刻之也、然未聞正平以前有刊本也、則其所謂重新者、是特對西土刻本、而云耳、我國刻論語、當以是

重新ハ西土ノ刻本ニ對シテ

謂ヘリ我國論語ヲ刻スルコト是ヲ始ト爲ス

爲始也、又此本題學古神德楷法日下逸人貫書十二字、上三本不聞有之、則此亦自別刻而已、然其詳不可得、而考姑記之、以俟他日考檢、寬政五年六月十八日源弘賢識、

林衡ノ所見

後年獲正平眞本、及削去題跋者、合二部俱藏、以爲不忍庫之榮焉、弘賢又誌、

〇本書ノ末尾ニ左ノ書狀一通粘付シアリ、

（端書）〔屋代大三郎樣　林大學（衡）頭〕

殘暑甚敷候得共、愈御安泰、珍重之御事ニ御座候、然者先日被遣候正平刊論語集解、家藏本と比校之所、何も相違い無之候得共、貴見跋文御考へ之通、いつれ別刊と存候、字畫毫髮之異有之、且又學古云々之十二字無御座候、右ニ付愚案ニい、家藏本之方刻古く、則學古神德楷法と申ニて可有之候、其後日下逸人貫と申人、影寫ニて書直シ、改刻候事と察存候、御本全部照數、先々完璧いたし候、御檢收可被下候、右得御意度、如此ニ御座候、以上、

日下逸人貫影寫シテ改刻ス

六月廿七日

〔泉州志〕一　西本願寺別院　同（神明町東）

當院者、元道祐之所開基眞宗寺也、道祐足利義氏之第四男、俗名祐氏也、幼而

道祐ハ足利義氏ノ

四男トノ説

喪父、共其母來居于當津、薩染號道祐、初學天台、後謁大谷本願寺覺如上人、爲一向專修念佛者、足利尊氏、至任將軍、依同姓舊緣、除寺地租稅、納封田若干戶、曆應年中、上人與道祐佛像聖敎等、今尙在矣、〇下略

道祐ハ儒者ナリトノ説

〔南山巡狩錄〕十二　此月（五月）、和泉國堺の浦に道祐といふ隱者あり、あらたに論語を鏤刻し世につたふ、是を正平板と云、〇中略、扨また和泉國堺の浦は、中古唐山より來舶せる湊にして、天正の頃までは、猶遺風のこれり、此故に堺の浦にて刻せる論語活板の文選、韓文、柳文等多く、今も世に流布せり、道祐何人たるを知らされとも、當時彼堺の浦にて、儒を唱し者なるべし、〇下略

高麗鈔本

〔讀書敏求記〕一經　何晏論語集解十卷

童年讀史記孔子世家、引子貢曰、夫子之文章可得聞也、夫子之言天道與性命、弗可得聞也已、又讀漢書列傳四十五卷贊、引子貢云、夫子之言性與天道、不可得而聞已矣、竊疑古文論語與今本少異、然亦無從辨究也、後得高麗鈔本何晏論語集解、檢閱此句、與史漢適合、因思子貢當日寓嗟嘆意于不可得聞中、同顏子之如有所立卓爾、故以已矣、傳言外微旨、若脫此二字、便作了語、殊無低徊未忍已之情矣、他如與朋友交言而不信乎等句、俱應從高麗本爲是、此書乃遼海道蕭公諱應宮、監軍朝鮮時所得、甲午初夏、予（錢遵王）以重價購之于公之仍孫、不啻獲

遼王重價ヲ以テ購フ

筆畫奇古ニシテ六朝唐人隸書碑ノ如シ版ノ如シ正平ハ朝鮮何時ノ年號ナルヤヲ知ラズ

黃丕烈ノ跋

高麗ノ鈔本トセシハ遼王ノ誤認

一珍珠船也、筆畫奇古、如六朝初唐人隸書碑版、居然東國舊鈔、行間所注字、中華罕有識之者、洵爲書庫中奇本、末二行云、堺浦道祐居士、重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹誌、未知正平是朝鮮何時年號、俟續考之、蕭公幼時、與吾曾祖侍御秀峰公、同居邑之西鄉、每相約入城、歸時對坐殿橋上、攜象戲下三四局、起望城中、而歎瓦如魚鱗、他時何地受一廛著我兩人耶、後竟各遂其志、蕭居城東、吾祖居城西、高門棹楔、衡宇相望、未及百年、而蕭氏式微、吾祖後蘭錡依然、風流未艾、循覽此書、廻環祖德、子孫其念之哉、子孫其敬之哉、

〔論語集解〕〇十（靜）嘉堂文庫所藏本

何晏論語集解十卷、有高麗本、此見諸讀書敏求記者也、記云、此書乃遼海道蕭公諱應宮、監軍朝鮮時所得、甲午初夏、予以重價購之於公之仍孫、似遼王之言甚的矣、其實不然、余向於京師遇朝鮮使臣、詢以此書、并述行間所註字、答以此乃日本書、余尙未之信、頃獲交翁海村、海村著有吾妻鏡補、擧正平年號問之、海村云、其年號實係日本年號、竝非日本國王之號、是其出吉野僭竊、其國號曰南朝、見日本年號箋、據此則書出日本、轉入朝鮮、遼王但就其得書之所、故誤認爲高麗鈔本耳、是書向藏碧鳳坊顧氏、余曾見之、後歸城西小讀書堆、今復散出、因

亦以重價購得、展讀一過、信如遵王所云、筆畫奇古、似六朝初唐人隸書碑版、不啻獲一珍珠船也、原有查二瞻詩一紙、僅黏附卷端、玆命工重裝入冊、記其顛末如此、己卯仲秋五日復翁識、

翁廣平ノ跋

己卯初夏、郡城黃蕘圃先生、出示舊鈔何晏論語集解、筆畫奇古、紙色亦古香可愛、此書平曾於錢遵王讀書敏求記中、見其目、云遼海道蕭公監軍朝鮮時所得、予以重價購之、行間所注字、中華罕有識者、末云、正平甲辰五月吉日、未知正平是朝鮮何時年號、平以高麗史海東諸國記考之、俱無此號、後見日本年號箋、知正平乃日本割據之年號也、按日本九十六世光嚴天皇丙子延元元年、有割據稱南朝者、出於吉野建都改元、時中國元順宗至元二年、歷四世五十五年而終、正平是共第二世、自稱後村上院天皇甲辰、是正平十九年、當日本九十九世後光嚴天皇貞治三年、中國元順宗至正二十四年也、夫海外之書、槧本寫本、所見亦有數種、雖格式各國不同、若行間有注字、則惟日本所獨也、朱竹垞跋吾妻鏡、所謂點倭訓於傍、譯之不見是也、是則此書斷爲日本所寫無疑、不僅紀年之符合也、平曾有日本著書目、然所見不得十一、近日宋槧及宋元舊寫本、日少一日、

行間注ルトコロハ獨リノ字ノ日本カノ流行ニカヽル

此書實係舊寫、況又來自海外、正遵王所云、書庫中奇本、而平亦得共賞其奇、幸甚幸甚、鶯脰漁翁翁廣平識、

陸心源ノ跋

〔皕宋樓藏書志〕十　論語集解十卷日本舊抄本 述古堂舊藏

魏何晏集解　何晏序

案書中遇吾字、俱缺首筆、語字亦然、豈避日本諱耶、每卷終注經若干字、注若干字、卷末有堺浦道祐居士重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹誌兩行、又有學古神德楷法日下缺二字、上一字似是逸字、書一行、正平係日本年號、詳翁氏海村跋、卷首卷末俱有虞山錢曾遵王藏書印記、

揭守敬ノ所見

〔日本訪書志〕二　論語集解十卷日本正平刊本

此本卷末跋云、堺浦道祐居士重新命工鏤梓、正平甲辰五月吉日謹誌、案正平甲辰爲日本後村上天皇正平十九年、當元順帝至正二十四年也、○中略據所云、重新鏤梓則猶有原本、可知驗、其格式字體實出於古卷軸、絕不與宋槧相涉、其文字較之群書治要、唐石經、頗有異同、間有與漢石經、史、漢、說文所引合、又多與陸氏釋文、所稱一本、合彼邦學者、皆指爲六朝之遺、竝非唐初諸儒定本、其語信不爲誣、○下略

原本ハ六朝ノ遺經ニシテ唐初諸儒ノ定本ニ非ズ

六月　大盡　癸巳朔

一日、癸巳、北朝、醴酒ヲ供ス、

〔師守記〕三十七　〇帝國圖書館本　六月一日、癸巳、天晴、辰刻降雨則止、酉時雷鳴、雨下則休、林鐘之候、季夏之朔、所願一々可成就月也、子孫繁昌、朝恩重疊、壽福增長延命、幸甚々々、〇略中今日造酒司進醴酒、沙汰者光久持參之、任例賜雜紙一帖、但代十文賜之了、去年如然、〇略下

雜紙一帖ヲ師茂ニ賜フ

二日、甲午、赤松則祐、安積盛兼等ノ本領播磨安積保下司、公文兩職及ビ三方西郷公文職等ヲ、同人ニ還補セラレンコトヲ幕府ニ請フ、

忠節ヲ致シタルヲ以テ執進ス

〔安積文書〕〇磨播　安積出羽入道盛阿子息右近將監盛兼

同平六左衞門入道胤阿等申本領播磨國安積保下司、公文、兩職幷三方西郷公文職、姫道村田畠等還補御下文申狀、謹進上之、子細載狀候歟、盛兼等厲(勵カ)當手致忠候間執申候、可被經御沙汰候哉、若此狀僞申候者、可罷蒙佛神之御罰候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

貞治三年六月二日　權律師則祐(赤松)(花押)

進上　御奉行所

〇赤松則祐、安積盛兼ノ申狀ヲ幕府ニ執進シ、其軍功ヲ證スルコト、文和四年二月五日ノ條ニ見ユ、

四日、丙申、幕府政所、右京職下司職ヲ、沼田朝光ニ宛行フ、

〔師守記〕三十七　〇帝國圖書館本　六月四日、丙申、天晴、朝間聊陰、小雨灑、午刻已後屬晴、入夜陰降雨、今朝法皇寺長老(空昭)來臨、家君對面給、九條右京職、自武家政所、被宛行沼田四郎候間、爲祕計去夜出京云々、〇略下

法皇寺長老空昭出京

五日、丁酉、天陰、終日雨降、今日法皇寺長老來臨、右京職下司事、內奏幷日案被調之、〇略下

空昭下司ノ事ニツキ內奏幷ニ日案ヲ師茂ト談合ス

六日、戊戌、天陰降雨、朝間聊休、〇略中今日法皇寺長老來臨、沙汰事被申談、〇略下

九日、辛丑、天陰、〇略中今日法皇寺長老空昭御房來臨、沙汰事被申談、〇略下

十三日、乙巳、天陰、〇略中是日法皇寺長老來臨、家君對面給、右京職下司職事、內奏之處、可被立武家使於政所頭人二階堂大藏少輔許也云々、內奏申次鞍智入道導朝云々、〇略下

十五日、丁未、天晴、申剋北方雷鳴、然而不雨下、今朝法皇寺長老來臨、家君對面

給、下司職事、鞍智入道、遣若黨於政所、令申之云々、忿相尋後藤筑後入道、可申入御返事云々、又遣筑後入道許之處、他行云々、申置之處、留守者、令申云、此事相原伯耆守執事代之時、入闕所注文之間、今度宛行沼田四郎歟之由、令申之由、長老被語申家君云々、又佐分利入道狀事被申之、〇中略今日法皇寺長老來臨、佐分（利殷カ下同ジ）入道口入狀被來取、則被進之、仍被向政所奉行二階堂中務少輔行元、有對面、委細所存被擇之、殊可得其意、被立御使之上佐分狀難去存之旨、返答云々、及晩長老重來臨、被語申此趣家君、

相原伯耆守ノ時ニ闕所注文ニ入ル

〔師守記〕〇三十八帝國圖書館本　七月二日、甲子、天晴、申剋許西方雷鳴、今日法皇寺長老來臨、右京職下司職事、沼田四郎左衞門尉朝光、去月廿六日、入代官於地下、被打渡了云々、

朝光代官ヲ地下ニ入レ下司職ヲ打渡サル

五日、丁卯、天晴、〇中略今朝法皇寺長老來臨、昨日內奏狀案被乞之被見、宗像入道可歸參之旨、被申被歸、則又來臨、無相違可淸書賜、夕方可進取之旨被申、被歸了、

〇沼田四郎朝光、右京職下司職補任ノ日詳カナラズ、姑ク是日ノ條ニ掲グ、

散狀

六日、戊戌、北朝記錄所庭中及ビ雜訴沙汰、

〔師守記〕〇三十七帝國圖書館本　六月二日、甲午、天晴、今朝召次有末持來記錄所廻文、來六日庭中之上、可有沙汰事云々、剋限眞實辰一點之由、載端書了、家君、予故障之由、載散狀了、〇下略

剋限眞實可爲辰一點之由、別所被仰下也、各可被存知、

四位大史（故障、撰得者、可參仕候、）　四位大外記（故障、候、）

刑部卿　大學頭

中大外記（故障、候、）　大夫史（奉、）

主稅頭（故障、候、）　掃部頭（故障、候、）

博士大夫判官（故障、候、）　大博士

大判事

右、來六日庭中式日之上、可有沙汰事、各如法辰一點可被參記錄所之狀、所廻如件、

貞治三年六月二日

五日、丁酉、天陰、終日雨降、〇中略今夕大夫史量實、借用家君牛、明日可參記錄所

之析云々、剋限眞實辰一點之由被仰下之間、未明可參仕候間、今夕申請云々、

出御庭中一箇條佐女牛烏丸屋事

六日、戊戌、天陰、○略中今日記錄所庭中也、寄人大夫史量實、開闔、番、奥歟、大判事明宗衣冠、端座、番、等參仕、被出御、庭中一ヶ條、佐女牛烏丸屋事云々、傳奏大宰權帥仲房、藤中納言時光、右衞門督忠光等卿著座、各直衣、著到如例、見參折紙明宗書之、剋限雖被愈、例剋限被行之、今日被行雜訴沙汰、帥、藤黃門、右金吾等也、職事頭宮內卿信兼朝臣一（人脫カ）參仕云々、

著到書樣

（裏書）著到書樣

六月

六日

量實番、

明宗番、

見參折紙書樣

見參折紙書樣

記錄所

六月六日見參

量實番、

明宗番、

記錄所

貞治三年六月六日庭中

先日庭中之後、無音之由、藤中納言令申之上者、早可催促矣、山門兒童虎松丸申佐女牛烏丸屋事、

著座

大宰權帥

藤中納言

右衞門督

近年稀ナル洪水

九日、辛丑、是ヨリ先、霖雨止マズ、山城洪水、是日、北朝、止雨奉幣使ヲ、丹生川上、貴布禰兩社ニ發遣ス、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　五月十五日、戊寅、天陰甚雨、酉剋雨脚休、入夜屬晴、洪水以外也云々、近年如此洪水無之云々、

今夕左近太郎友永、自嶋下御稻上洛、此次遣神崎六車御稻代官、鳥目二連借送之、但此内五十文者、粽代云々、又茶二袋志之、洪水過法之間、以種々方便上洛之由語之、

北山科稻入草不入之

（頭書）今日北山科御稻入草不入之、依洪水也、

十六日、己卯、天晴、霖雨過法之處、屬晴之條神妙也、（略）○下

夫丸鴨川ニテ流死

（頭書）今日自田井保月栄到來、地頭方上洛、夫丸於鴨川流死了、不便々々、

十七日、庚辰、天晴、午斜小雨灑則止、今日北山科御稻供御人刑部入道智淨來云、今度洪水、彼耕作御田二段内一段餘流草風情公事、當年有御免者、相尋苗、重可耕作、數十人苦勞云々、重可遂耕作之條神妙、但入草等御免不可叶之由仰之間、耕作難義（歟）令申、退出了、

北山科稻田二段ノ内一段餘流ル

廿三日、丙戌、天陰降雨、未剋甚雨、申剋休、（略）○中今日藏人右中辨嗣房觸申局務云、明日可被發遣止雨奉幣使、任例可被致沙汰候云々、不及請文、可存知之旨、被答了、則被下知文殿代助豐了、

奉幣使ヲ二十四日ニ發遣セントス

（裏書）明日可被發遣止雨奉幣使、任例可被致御沙汰候狀如件、

右中辨嗣房判

五月廿三日

四位大外記殿

明日廿四日可被發遣止雨奉幣使、任例可被致沙汰、相觸分配四隨外史、可被申散狀之由、被仰下候也、仍執達如件、

延兼上

五月廿三日

外記文殿

廿四日、丁亥、天晴、申剋小雨灑則止、今朝文殿代官來申云、今日止雨奉幣、四隨外記可參之由被申云々、

四隨良種所勞

今日大儒宗季進狀局務云、今日止雨奉幣、良種雖所勞事候、可攝參陣之由令申候、延否不審存候、以此使者被尋職事、可奉存之趣也、仍以彼使者載狀被尋問職事之處、延引可爲明後日之由、以詞令申候間、此趣勘付大儒狀被遣了、依屬晴延引歟、

晴ニ屬スルヲ以テ延引

六月九日、辛丑、天陰、時々雨下、今日藏人右中辨嗣房觸申云、今日可被發遣止雨奉幣使、任例可被致沙汰云々、則被下知文殿助豐了、慾可下知分配外記康隆之旨、被載狀了、（略）○中

上卿

今夜被發遣止雨二社奉幣使、上卿權中納言藤原忠光卿、右衛門督奉行職事藏人右中辨藤原嗣房、辨方兼行、右大史高橋秀職等參陣、六位外記不參、內記同不參之間、秀職懃代云々、宣命已下注裏、

勘文

今日（廣書）可被發遣止雨奉幣使、任例可被致沙汰之狀如件、

六月九日　　右中辨嗣房判

四位大外記殿

宣命

擇申、可被奉遣止雨御幣使於丹生川上幷貴布禰社日時、

今月九日辛丑　時子二點

貞治三年六月九日　　權陰陽博士賀茂朝臣在音

陰陽（頭書）頭清周朝臣觸穢之間、在音勘申之、

宣命（盡カ）正文書日、兩社同前、

天皇我詔旨止、掛畏支某乃大神乃廣前爾、恐美恐美毛申給者久申久、去月以來多數日之間多、陰雲薈蔚止志、霖雨（滂沱カ）陰陀多利、百穀不熟志、衆民有愁利、

故是以吉日良辰乎擇定、官位姓名乎差使、禮代乃御幣乎令捧持、赤毛乃御馬一疋乎牽副、奉出給布、大神此狀乎平久安久聞食、浮靄忽收、高天快晴禮、及收獲之期万志、無旱澇之難、九土豐饒爾、万國愷樂爾志、天皇朝廷乎寶位無動久、常磐堅磐爾夜守日守爾護幸給倍止、恐美恐美毛申賜者久止申、

貞治三年六月　日

差文案

神祇官

差進止雨奉幣丹生貴□（上）禰社使事、

丹生河上社使

從五位下行尾張權守大中臣朝臣清直

貴布禰社使

正六位上直宿禰友恒

右依官宣所差進如件、

南朝正平十九年　北朝貞治三年六月九日

貞治三年六月九日

從二位行伯資繼王　　從五位下權（行脱カ）少祐齋部宿禰親有

神祇官

勘申、止雨奉幣丹生、貴布禰兩社幣帛事、

丹生河上社一前

貴布禰社一前

五色絹各壹疋　生絹壹疋　糸貳句

綿貳屯　木綿貳斤　麻貳斤

調布肆段　薦貳枚　朸貳支

赤馬貳疋

右依官宣所勘申如件、

貞治三年六月九日

從二位行伯資繼王　　從五位下行權少祐齋部宿禰親有

十日、壬寅、北朝御體御卜奏、

〔師守記〕三十七　〇帝國圖書館本　五月廿七日、庚寅、天晴、朝間聊陰、〇略中今日藏人佐宗顯（裏書）觸申云、御躰御卜奏、任例可被催下知云々、則被出請文了、

（白紙也、）御卜奏、任例可被催下知之狀如件、

五月廿四日　　左兵衛權佐宗顯判

四位大外記殿

御卜奏、任例可被催下知之旨、可存知候、仍言上如件、

五月廿七日　　大外記中原師茂

六月十日、壬寅、天陰、〇略中今日御躰御卜奏、依上卿不參、被付內侍所云々、仍分配外記康隆不及參陣云々、

上卿不參ニツキ內侍所ニ付ス

十一日、癸卯、北朝、月次祭及ビ神今食ヲ延引ス、

〔師守記〕三十七　〇帝國圖書館本　五月廿六日、己丑、天晴、〇略下

（裏書）月次祭幷神今食、任例可被致沙汰之由、被仰下之狀如件、

五月廿六日　　宮內卿信兼朝臣判

四位大外記殿

神今食卜形三通

□(廿)九日、壬辰、天晴、酉半剋西方雷鳴兩三度聞、小雨間灑則止、○中略今日神今食卜形三通、被遣文殿代助豐許、雖可召爲早速也、公卿幷少納言、外記等卜形三通立文上下押折、其上ニ卷喚名折紙、以紙捻結之、副狀被遣了、付本官忿可被下申之由、被下知了、○中略

神今食卜形書樣

神今食卜形書樣

權大納言藤原朝臣實繼　按察使、服假去年八月二日喪父、之間除之、

藤原朝臣宣明　未拜賀、

藤原朝臣師良　左大將未拜賀、

藤原朝臣公直

藤原朝臣兼定

藤原朝臣忠基

藤原朝臣實音　未拜賀、服解之間除之、實繼卿舍弟、

藤原朝臣房經　未拜賀、

藤原朝臣實時　未拜賀、

源朝臣義詮　征夷大將軍、未拜賀、

權中納言藤原朝臣公豐

源朝臣具通

藤原朝臣實尙

藤原朝臣俊冬

藤原朝臣宗實　未拜賀、

藤原朝臣實直

藤原朝臣時光

藤原朝臣隆家　服解之間除之、未復任、今年三月十四日喪父、

藤原朝臣忠光　右衞門督、

參議藤原朝臣爲忠　駿河權守、未拜賀、

藤原朝臣實澄　左中將、伊與權守、未拜賀、

藤原朝臣保光　土左權守、

藤原朝臣隆右

源朝臣定具　左中將、備中權守、

藤原朝臣實綱　左中將、讚岐權守、

藤原朝臣資定　近江權守、

藤原朝臣爲遠　右兵衞督、未拜賀、正四下、

貞治三年六月　日

別紙也、

少納言平　朝臣棟有　從四下

菅原朝臣秀長　從四下、紀伊權守、

貞治三年六月　日

別紙也、

少外記中原康隆　隼人正、少內記、

中原師興　音博士

權少外記三善倫義　武家仁之上、不出仕之間除之、

清原良種　書博士

貞治三年六月　日

折紙也、

中御門大納言（宣明）

左大將（二條師良）殿

菊亭大納言（公直）

花山院大納言（兼定）

九條大納言（忠基）殿

一條大納言（房嗣）殿

德大寺大納言（實時）

鎌倉大納言（義詮）

三條中納言（公豐）

久我中納言（具通）

大宮中納言（實尙）

坊城中納言（俊冬）

大炊御門中納言（宗實）

南朝正平十九年　北朝貞治三年六月十一日

菊亭中納言（實直）
藤（日野時光）中納言
右衛門督（柳原忠光）
二條宰相（爲忠）
橋本宰相中將（實憲）
日野宰相（榮光）
四條宰相（隆右）
土御門宰相中將（定具）
左宰相中將（正親町實綱）
吉田宰相（資定）
右兵衛督（御子左爲遠）

捻文也、
御卜奏幷月次神今食、任例可令致沙汰、兼又神今食卜形被遣之、忩付本官可令卜申、雖可被召候、爲早速如此被仰下候也仍執達如件、

五月廿九日　延兼上

外記文殿

六月二日、甲午、天晴、〇略中今日神今食卜形、文殿代官持來之、則乙下合、丙合、上卿宰相注折紙、副卜形正文賜之、以當番召使、忩相觸可申散狀之由被下知、又少納言外記卜形不裹賜之、忩以使部相觸可申散狀之旨、同被仰之了、〇略下

三日、乙未、天晴、〇略中今日神今食卜合上卿以下注折紙、被付奉行職事頭宮內卿信兼朝臣、慥賜之由、以詞有返事、〇略中

神今食卜合上卿以下注別紙進上候、任例可有申御沙汰候哉仍言上如件、

六月三日　大外記中原師茂（狀）

進上　頭宮內卿（信兼）殿

折紙

神今食卜合上卿宰相少納言事

一上卿

乙下合

大宮中納言　注遺文殿ニハ小狀奥少納言除之、是少納言外記事、別相觸候故也、

丙合

菊亭大納言

久我中納言

一宰相

乙下合

日野宰相

丙合

二條宰相

吉田宰相

一少納言

乙下合

菅原秀長朝臣

丙合

平棟有朝臣

料足無キニ依ル

十一日、癸卯、天晴、○中略今日月次神今食延引、依無料足也、

足利基氏、成田泰直、玉井覺道等ヲシテ、片楊長門入道某ノ相模大慈寺新釋迦堂領武藏横沼郷ノ地ヲ押領スルヲ退ケ、下地ヲ同寺雜掌ニ交付セシム、

〔相州文書〕十四鎌倉郡文書十二所村五大堂明王院所藏

大慈寺新釋迦堂寺領武藏國横沼郷事、任今月十一日御教書之旨、玉井藏人入道相共莅彼所、退片楊長門入道押領、沙汰付下地同雜掌候畢、仍渡狀如件、

貞治三季六月廿五日　　下總守泰直(成田)(花押)

大慈寺新釋迦堂領武藏國横沼郷事、任今月十一日御教書之旨、成田下總守相共莅彼所、退片楊長門入道押領、沙汰付下地寺家畢、仍渡狀如件、

貞治三年六月廿五日　　沙彌覺道(玉井)(花押)

十二日、甲辰、足利基氏、岩松直國所領上野新田莊由良郷ノコトヲ、幕府ニ申達ス、

〔士林證文〕二〇肥前

南朝正平十九年　北朝貞治三年六月十二日

新田治部(岩松)少輔直國申上野國新田庄由良郷事、可被經御沙汰候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

貞治三年六月十二日　左兵衛督基氏(花押)

進上　治部(斯波義將)大輔殿

○岩松直國ノ養母妙蓮、上野、下總讃岐ノ所領ヲ直國ニ讓ルコト、建武元年十二月二十一日ノ條ニ尊氏、岩松直國ヲシテ、上野新田莊内由良、成墓兩郷及ビ菅鹽等ノ地頭職ヲ領セシムルコト、貞和三年四月二日ノ條ニ、足利基氏、直國ノ本領ヲ安堵セシムルコト、貞治元年八月十一日ノ條ニ見ユ、

十四日、丙午、北朝、石清水八幡宮權別當永清ヲ同別當ニ補ス、

〔石清水八幡宮略補任〕○別當別本　永清撿校超清、　貞治三六十四宣下、同十五日立砂、

祇園御靈會、

〔師守記〕三十七○帝國圖書館本　六月一日、癸巳、天晴、辰剋降雨則止、酉時雷鳴雨下、○下略

神輿迎久世舞車鉾等ヲ催ス

武家小舍人宮主法師ヲ殺害ス

神輿ヲ武家ノ第ニ入レントス

師茂心經百卷讀誦供養ス

義詮見物ス

侍所ニ棧敷ヲ構フ

小舍人等六人ヲ禁籠ス

今日祇園神輿不□(參カ)出透廊云々、依山門訴訟歟云々、七日、己亥、陰晴不定、○中略今日祇園御輿迎如例、鉾以下冷然、久世舞車有之云々、作山風流等无之、定鉾許也、申斜御行、依山門訴訟、朔日不奉出透廊、今朝侍所所司代、向社頭奉出之、則成御行云々、少將井於二條東洞院、爲武家小舍人、宮主法師一人被殺害之間、舁歸神輿、振棄死人許、血染付神輿、神人等退出之間、所司代以被管、奉舁御旅、召出巫女奉入之云々、以外□(珍カ)事也、可舁神輿於武家第由、神人令申之間、武士面々、帶甲冑馳參之云々、然而無其儀、神妙々々、今日、予轉讀心經百卷、奉迴向祇園、每年儀也、○下略

今日(頭書)大樹(義詮)被見物云々、土岐宮内少輔、侍所搆棧敷云々、妾物產所細々被渡云々、觸穢人也、見物不可然歟、爲之如何、

八日、庚子、天陰、○中略今日傳聞、令致害祇園宮主小舍人等六人、令禁籠云々、但不知實否、

少將井神輿井牆鳥居風情、喧嘩之時、宮主等奉取歟、不付神輿云々、

十三日、乙巳、天陰、巳一點以後降雨、申斜巳後雨脚休、○中略今夜密々助教縫殿權助音博士等、參祇園御旅所、予雖可參之處、足有雜熱事之間存略、轉讀心經

御行三條小路ニ於テ田樂法師人神犬ト喧嘩スト坂者疵ヲ被ル

義詮三條烏丸ニ桟敷ヲ構ヘテ見物ス

神輿新造ノ沙汰ナク還御

新座田樂幸夜叉

百卷、觀音經一卷、奉遙拜之了、

十四日、丙午、天晴、申剋許雨下則止、今日祇園御靈會如例、鉾以下冷然、無作山等、於定鉾者、如近年歟、久世舞車有之云々、〇中略

今夕酉斜御行一基、不取松明、二基者戌剋御行、取松明、無爲御行神妙々々、御行時分、於三條油小路、田樂與犬神人有喧嘩事、是田樂乘馬通犬神人中之間、無禮之由問答之、自馬打落云々、田樂一人於當座被殺害、坂者被疵云々、以外也、然而二基神輿、不撤死人、成申御行、侍所所司代土倉勢帶甲冑、若黨奉舁神輿云々、珍事也、

〔東寺執行日記〕一　六月七日、祇園御輿迎有之、但小將井神人等、與武家小舍雜色等引出喧嘩、神人一人被殺害云々、仍神輿ニ付血訖、神人等頂戴神輿、爲振入將軍御所、侍所馳向妨申之間、振捨路頭了、其後入御旅所云々、

十四日、祇園御輿還御、抑小將井神輿觸穢之上者、尤所奉新造之處、不能其沙汰還御云々、但御座透郎云々、神人等以外及訴訟之由、有其聞矣、又新座田樂幸夜叉、爲坂物被殺害云々、

十五日、丁未、北朝、祇園臨時祭ヲ延引ス、

〔師守記〕三十七　〇帝國圖書館本　六月十五日、丁未、天晴、〇中略今日祇園臨時祭延引、

北朝、周防下得地保國衙分ヲ、東福寺造營料ニ寄ス、

〔東福寺文書〕五　〇山城

周防國下得地保國衙分事、造營之間、所被寄附當寺也、存其旨、可被專成風之功者、依天氣執達如件、

貞治三年六月十五日　右少辨（勘解由小路仲光）（花押）

東福寺長老（東傳）士啓上人御房

〔前田家所藏文書〕古蹟文徵三

東福寺雜掌申周防國下得地保檢注事、申狀遣之、當寺造營最中也、所詮造畢之間、宜閣其節之旨、可相觸東大寺雜掌之狀如件、

貞治三年六月十九日　大內介（弘世）（義詮）（花押）

造營最中

〇南朝、東福寺ニ、同寺領周防下得地保國衙ノ惣檢ヲ免ゼシムルコト、

正平十七年二月十二日ノ條ニ見ユ、

光嚴法皇、播磨的部南條ノ地ヲ、天龍寺ニ寄セラレ、禪人ノ粥飯料ニ宛テ給フ、

〔天龍寺重書目錄〕甲（光嚴院甲一）

平生一鉢ノ資緣

竊以達磨一宗、只在修禪定、々々若不修、教外之宗掃地而盡矣、由此曾發小願、將平生一鉢資緣、（播磨國的部南條、）滅後永寄附天龍寺、用充專好坐禪者粥飯、僧衆宜隨收納多少、切莫違我願爲幸、（智覺普明國師行業實錄、諸宗勅號記異事ナシ、）

貞治三年六月十五日　　御判（光嚴法皇）

天龍寺長老

播磨國的部南條郷、光嚴院殿永代御寄付當寺僧堂粥飯料所之由、被聞食之旨、天氣所候也、仍執達如件、

貞治三年六月廿九日　　右辨（脫アラン）御判

天龍寺長老上人御坊

院宣

百丈軌範ヲ專ニス

播磨國的部南條郷事、光嚴院殿御寄附天龍寺僧堂粥飯料所由、被聞食了、雖爲立錐之要脚、被表如玉之叡願、殊專百丈軌範、須開五葉光華者、院宣如此、仍執達如件、（僧堂勅修寺）

貞治三年六月廿九日　　判

春屋（秘地）上人御坊

厨首塔寮等燒亡、佛殿僧堂等無爲

○崇光上皇、天龍寺ニ、光嚴天皇塔頭ノ建立ヲ聽シ、之ヲ住持妙葩ニ傳ヘサセラレ、尋デ、播磨的部南條ノ地半分ヲ、御料所ト爲シ給フコト、八月二十八日ノ條ニ、義詮、之ヲ安堵セシムルコト、明年七月二十六日ノ條ニ見ユ、

萬壽寺災ス、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　六月十五日、丁未、天晴、○中略今日未剋萬壽寺厨幷首塔寮等燒亡、佛殿僧堂長坊無爲云々、自厨火出來云々、六條道場近々之間、家君被遣國隆於下一御房許、而他行之間、申置歸了、

十六日、戊申、北朝、記錄所庭中及ビ雜訴沙汰ヲ延引ス、尋デ、マタ延引ス、

〔師守記〕三十七　○帝國圖書館本　六月十一日、癸卯、天晴、○下略

散狀

（頭書）今朝來十六日出仕記錄所事、被尋掃部（頭書）頭處、祕計入候由返答、
十三日、乙巳、天陰、巳一點以後降雨、申斜巳後雨脚休、今日召次行包持來記錄
所迴文、來十六日庭中式日之上、可有沙汰事云々、家君予故障搆得者、可參仕
之由、載散狀返賜之、○略下
（裏書）剋限眞實可爲辰一點之由、別所被仰下也、各殊可被存知、延引可爲來
廿一日、可被存知、

四位大史故障候、　四位大外記故障搆得者、可參仕候、
刑部卿　大學頭
中大外記　大夫史奉、
主稅頭故障搆得者、可參仕候、　掃部頭
博士大夫判官　大博士故障候、
大判事（所ヵ）相勞事扶得者、可參仕候、

右來十六日庭中式日之上、可有沙汰事、各如法辰一點、可被參記錄所之狀、
所迴如件、

貞治三年六月八日

散狀

二十一日ニ延引

十五日、丁未、天晴、申剋北方雷鳴、然而不雨下、○略下
（頭書）今朝召次行包來、明日記錄所庭中延引、可爲來廿一日云々、此趣載迴文端
書了、可存知之由答了、
十六日、戊申、天晴、今日記錄所庭中幷雜訴沙汰延引、可爲廿一日云々、
廿日、壬子、天晴、○略中今日家君以使者、明日記錄所庭中延否事、被尋頭宮內卿
信兼朝臣之處、延引云々、
廿一日、癸丑、天陰降雨、○略中今日記錄所庭中幷雜訴沙汰又延引云々、○略下
（裏書）

□□□

右來廿六日庭中式日之上、可有沙汰事、各如法辰一點、可被參記錄所之狀、
所迴如件、

二十六日ニ延引

貞治三年六月廿一日

近江守護佐々木氏賴、石清水八幡宮ニ參籠ス、

〔師守記〕（三十七 ○帝國圖書館本）六月十六日、戊申、天晴、（○中略）今日佐々木判官（正綱）入道、（江州守護）參詣八幡、自今日三七ヶ日可參籠云々、依宿願也、

三七日ニ亙ル

○佐々木氏賴、石清水八幡宮ニ詣シ、宿院造營ノ儀ヲ議スルコト、四月十九日ノ條ニ見ユ、

十七日己酉、北朝大炊寮、勘解由小路兼言室清原氏ノ妹堯心ヲ、攝津富田御稻仕女職ト爲ス、

室清原氏ハ故友阿ノ女

〔師守記〕（三十六 ○帝國圖書館本）四月十七日、辛亥、天晴、今日兼言（勘解由小路）朝臣妻室（故友阿息女）、來、予對面、（於助教殿曹局）富田御稻仕女職事、半分故友阿讓賜之處、故國尙不宛付（行カ）及多年、於今者、無盡期之上、可申安堵云々、且讓正文有堯心房許歟、可有御尋云々、召寄一提、烏目一連賜國隆、召寄之無心也、暫雜談之後歸了、

友阿ノ讓狀ハ妹堯心房ノ許ニアリ

十九日、癸丑、天晴、（○中略）今日富田御稻仕女職事、故友阿讓狀可持來之由、令申堯心房了、

堯心房友阿ノ讓狀ヲ持參ス

廿一日、乙卯、天晴、（○中略）今日堯心房來、予於助教殿曹局對面、故友阿讓狀持來見申、家君寫留被返了、勘解由小路女性令申安堵者、可申之由申之歸了、（○中略）

是日、勘解由小路女性賜狀、富田間事催促之、就堯心房左右可申旨、遣返事了、（校正了、）

攝津國富田御稻仕女職事、

故右衞門尉貞直、買取代々寮家御下文以下證文等、多年領知之後、渡故妙一房畢、然者由緒相傳地也、初若母幷勘解由小路御方半分宛可被知行、供御役每月五斗（御斗內膳方、）一斗（宣旨斗、）主水方御粥析、此外御强物平野祭供神物鉦取分、少々在之、寮役ハ雖有其數、近年地下河成幷芥田河一族以下押領後、自貞直之時有御免、但正月毗沙門講三百文、小舍人所酒肴百文ハ、年始公事沙汰進者也、兼又此後分（得カ）內用途三貫文、可被沙汰下和泉女房一衣析、如予存日爲無相違也、且此趣可被申入寮家、各友阿息女也、何不被垂御哀憐哉、仍染一筆了、但女性事、面々一命之後者、如元可被返付相直（貞カ）跡、

寮役御免ノ地

友阿ノ讓狀

觀應元年七月十八日　沙彌友阿判

廿二日、丙辰、天晴、（○下略）

堯心一圓安堵セラル

安堵料五百疋

（頭書）今日富田御稻仕女職半分事、可賜安堵（云々カ）〻、断可用意由、申遣兼言妻室了、

地下文書不所持、可被召出由申之、

〔師守記〕（三十七帝國圖書館本）　五月十八日、辛巳、天晴、（略）○中今朝國隆遣兼言朝臣妻室許之處、物詣云々、富田仕女職事爲令申也、

六月十五日、丁未、天晴、申剋北方雷鳴、然而不雨下、（略）○中今朝國隆遣勘解由小路兼言妻室許之處、聊客來之間物忿、晝程可來云々、富田御稻仕女安堵事、爲令申遣了、

十六日、戊申、天晴、（略）○中今日國隆遣堯心房許、富田御稻仕女職事、勘解由小路女性申子細、一圓可申安堵、不然者、雖爲半分、急速可令安堵之趣也、一圓可申安堵之由令申之、

十七日、己酉、天晴、申剋小雨灑、不及地濕止、（略）○中今日堯心房來、於助教殿曹局予對面、富田御稻仕女職事、可申安堵之断也、今朝遣國隆、一圓可安堵之趣申遣了、書賜寮家宛文、件仕女職事、去觀應、父友阿、勘解由小路女姓（性カ下同ジ）與堯心讓與之、仍各可申安堵之趣、此間再三問答之處、勘解由小路女姓、（堯心房姉）當百五十疋外、不可致沙汰之由令申間、依不可然、堯心房一圓可申旨、被仰候間令申之、安堵断五百疋內當進三百疋、申次分百疋致沙汰、殘二百疋并申次百疋者、來十月中可致沙汰之由、進置請文了、予申沙汰之間、申次分取之、目代尤可申沙汰之處、年少之間不叶之故也、

大炊寮下文

姉清原氏辭退スル幷ニ供御米幷寮家ノ公事物等懈怠ナク沙汰スベシ

大炊寮下　攝津國富田御稻田

定補　仕女職事

（寮家自筆）清原氏女

右任父友阿觀應讓、以件人所被補彼職也、且件職雖讓與姉妹兩人、姉辭申之間、被補一人者也、任先例、供御米幷寮家御公事物等、無懈怠可致其沙汰者、供御人等宜承知、敢勿違失、故以下、

貞治參年六月十七日　頭兼大外記下總守中原朝臣（在判）

寮家ノ宛文

（別申請候間、書賜了、在判）攝津國富田御稻仕女職事、被補任候、供御米幷寮家御公事物如此間、暫被閣之候、地下隨被沙汰、直可被致沙汰、且當所得分、父友阿雖讓與姉妹兩人、姉女姓不可申安堵由、辭申之間、被申付一圓候、縱向後雖有申旨、不可及御

紹明ノ門徒管領シ十方院トナスベシ

沙汰之由、被仰下候也、仍執進如件、

六月十七日　　彈正忠延兼上

富田御稻仕女殿

十八日、庚戌、天陰、○中略今日鳥目一連與國隆、是富田御稻仕女職事、爲使節細々粉骨之間、申次內與之了、

廿日、壬子、天晴、今曉卯剋、雨下則止、入夜戌剋許、甚雨雷鳴、終夜不絕、時々休、今日富田御稻仕女安堵析當進三百疋、殘百疋堯心房沙汰進之、

〔參考〕

〔攝津志〕五　島上郡　富田、町名、廿四、村里

十九日、辛亥、義詮、尾張妙興寺ヲ諸山ニ列ス、

〔妙興寺文書〕○五尾張

尾張國妙興寺事、爲諸山之烈、（紹明）大應國師門徒管領之、宜爲十方院之狀如件、

貞治三年六月十九日　　當寺長老　　（附箋「寶篋院殿義詮公」）御判

〔參考〕

御教書

〔扶桑五山記〕二諸山　日本彈院諸山座位次事　尾張州

長嶋山妙興報恩禪寺、開山滅宗和尙、諱宗興、謚圓光大照禪師、嗣大應、開山塔曰天祥菴、漸入佳境、

二十三日、乙卯、幕府、尾張守護土岐賴康ヲシテ、猿子賴蔭ノ東寺八幡宮領尾張大成莊領家職ヲ濫妨スルヲ停メ、下地ヲ同寺雜掌ニ交付セシム、

〔東寺執行日記〕一　六月卅日、自大成庄有音信（衍カ）有之、

七月二日、

東寺雜掌賴憲申尾張國大成莊領家職事、重解狀如此、爲當寺八幡宮領重色異他之條、度々其沙汰訖、而猿子（賴蔭）美濃入道濫妨未休云々、招罪科歟、不日退彼輩、沙汰付下地於雜掌、可被執進請取之狀、依仰執達如件、

貞治三年六月廿三日　　左近（斯波義高）將監　在判

土岐大膳（頼康）大夫入道殿

表書云、

土岐大膳大夫入道殿　　左近將監義高

奉行中澤掃部大夫信綱

去月廿四日引付、爲永格每度引上、廿三日被行之、仍彼日付也、今日到來、先以

土岐直氏書狀案

祝著々々、

廿五日、天晴、〇中略爲大成莊事參侍所、土岐宮內少輔、卽有對面、但猿子方內書事ハ不可叶云々、縱雖言遣彼仁、不可敍用、仍難治云々、次光錄（綱廉）方狀事ハ如去年可書進、今兩三日之間、可賜取雜掌云々、〇下略

廿八日、同（天埼）、宮內少輔殿狀案畏申入候、

抑先日令申入候東寺八幡宮御領尾張國大成莊事、重御敎書をかされ候、郡戶入道致違亂之由申候、早々ニ止彼違亂候、東寺代官方へ被仰付候、畏入候、返々委細可申之由、被仰出候之間、如此令申候、恐惶謹言、

貞治三七月廿八日　　直氏狀在判

齋藤中務忠（ヤヽ）殿

表書云、齋藤中務忠殿　　直氏狀

八月十日、慶妙法師下向大成莊了、

九月一日、降雨、中略〇自大成莊預所訴狀到來、去月十日慶妙下向事、無相違之由申之、但當莊遵行事、光錄去月十九日發向伊勢國之間、於當國難及沙汰、於伊勢國可有其沙汰之由返答云々、

理趣三昧論義

〇幕府、土岐賴康ヲシテ、猿子賴蔭ノ東寺領尾張大成莊領家職ヲ濫妨スルヲ停メ、下地ヲ同寺雜掌ニ交付セシムルコト、去年七月十八日ノ條ニ見ユ、

樂拍子

二十五日、丁巳、東寺、後宇多天皇ノ聖忌御佛事ヲ修ス、

〔東寺執行日記〕一　六月廿五日、同（天埼）、後宇多院聖忌御佛事、理趣三昧并論義有之、

二十八日、庚申、崇光上皇、琵琶蘇合香第四帖ヲ、榮仁親王ニ授與シ給フ、

〔伏見宮御記錄〕太第參號崇光院ヨリ大通院殿ヘ御傳授書

檀帋二枚、以二枚爲立帋、蘇合香

第四帖樂拍子、

右曲授竹園（榮仁親王）訖、

貞治三年六月廿八日　　御判（崇光上皇）

二十九日、辛酉、北朝復任除目、

〔公卿補任〕三十四　權中納言從三位同（藤）隆家、三十七、右衞門督、使別當、正月五日同（四條）

四條隆家復任

敍正三位、二月(三カ)日喪父、四月十四日止督、六月廿九日復任、

〔師守記〕三十七〇帝國圖書館本　五月十三日、丙子、天陰降雨、〇略中今日四條中納言隆家卿觸申局務云、復任事、可被申沙汰云々、可存知之旨被答了、

隆家ノ狀

是日、四條中納言復任、相尋日次可申沙汰歟之由、付頭宮內卿信兼朝臣、被伺申了、有計會事、自是可申御返事之趣、以詞有返事、〇略中

復任事、可被申沙汰之狀如件、

五月十三日　隆家卿判

四位大外記殿

師茂ノ返狀

御復任事、可申沙汰之由、謹奉候了、可存知候、師茂恐惶謹言、

五月十三日　大外記中原師茂狀

師茂復任ニ日次幷ニ沙汰ヲ信兼ニ問フ

四條中納言復任事、被相觸候、可爲何樣候乎、相尋日次可申沙汰候歟、可有御伺候哉、恐惶謹言、

五月十三日　師茂狀

信兼持病ノタメ沙汰スルヲ得ズ

頭宮內卿殿

十六日、己卯、天晴、〇略下

今日頭卿以狀一條中納言復任事、可申沙汰之處、持病更發事候間、難申沙汰云々、

師茂改メテ嗣房ニ問フ

十七日、庚辰、天晴、〇略下

今日家君、四條中納言復任事、被觸藏人右中辨嗣房了、可伺申之由有返事、頭卿信兼朝臣子細故也、

四條顯保復任ノ事ヲ局務ニ觸ルル隆家補歷ノ直改ヲ師茂ニ催ス隆家ノ書狀

四條中納言復任事、被相觸候、可爲何樣候哉、相尋日次可申沙汰候歟、可有御伺候哉、恐惶謹言、

五月十七日　師茂

藏人右中辨殿

十八日、辛巳、天晴、〇略中今日四條少將顯保朝臣復任事觸申局務、此次中納言復任事、被付何職事候哉、可奉之趣進狀、又送進補歷、可直給云々、

復任事、被付何職事候哉、可奉候也、補歷進之候、直給候者爲悅候、謹言、

五月十八日　隆家

表書　四位大外記殿

師茂ノ返狀

御復任事、今月十三日觸承候之間、同日付頭卿候之處、同十六日所勞事候之間、申沙汰不可叶之由、申賜候之間、仍昨日付進藏人右中辨候之間、可申沙汰之由返答候、直可有御催促候歟、

御補歷賜預了、忝可直進上候、每事可參入言上候、師茂恐惶謹言、

五月十八日

顯保ノ書狀

加禮紙狀也、

復任事、可令申沙汰給、謹言、

五月十八日　　左小將顯保

四位大外記殿

師茂ノ返狀

御復任事、可申沙汰之由、承了、可存知候、恐惶謹言、

五月十八日　　師茂

師茂隆家ノ宿所ヲ訪フ

廿六日、己丑、天晴、〇略中　今日家君自記錄所退出之次、被遣（立カ）寄四條中納言隆家卿宿所、籠居以後未無御音信之故也、黃門對面、中門內對座、被著薄墨直垂、三月十二日被召傳奏、故大納言（隆家）存日之間、畏申之旨被語申之、又復任間事、帥卿可被示局務之樣、被語示之、其後退出、次予對面、日數以後寂前可參上之處、無殊事之間、御物忌察存之間、不參上之趣令申、又傳奏參賀申之、委細有返事、補歷先日進局務了、依有他事便宜也云々、其後被入內之後退去、〇略下

師茂復任除目日次ヲ賀茂清周ニ問フ

今日帥卿於記錄所被仰局務□（云カ）四條中納言復任、相尋日次可被申沙汰之由、被仰下云々、可存知旨被申了、

廿七日、庚寅、天晴、〇略下

今日復任□（徐）□（目）日次事、被尋問陰陽頭清周（賀茂）朝臣、他行之間被置狀云々、

可被行復任除目之由、被仰下候、日次隨所在可（見カ）被注進給也、恐々謹言、

五月廿七日　　師茂

清周觸穢アルニ依リ復任除目日次定ハザル

陰陽頭殿

廿八日、辛卯、天陰、〇略下

今日四條中納言復任除目日次、被尋陰陽頭清周朝臣之處、至來十日觸穢（穢カ）事（下同ジ）候之間、不可叶候由、以詞返答、返進狀了、昨日被遣狀之處、他行之間、今日

旨ヲ答フ

被遣取返内舍人事了、

師茂日次検定ヲ誰人ニ命ズベキヤヲ嗣房ニ問フ

六月三日、乙未、天晴、〇略中今日家君以狀被尋藏人右中辨嗣房云、復任除目日次事、相尋陰陽頭候之處、至今月十日頃、觸穢事候之由返答、可爲何樣、如日次此間被尋仰誰人候哉、奉存可相尋云々、可被相尋在(實茂)音候歟之由、有返事間、則以狀被尋問權陰陽博士在音之處、載狀注進之、仍彼返狀被付職事藏人右中辨、可伺申之旨、以詞有返事、各注裏、〇略下

(裏書)復任除目日次事、相尋陰陽頭候之處、至今月十日比、觸穢事候之由返答候、可爲何樣候哉、如日次此間被尋仰誰人候哉、奉存可相尋候也、恐惶謹言、

六月三日　師茂狀

(高倉小路嗣房)春日殿

嗣房賀茂在音ヲ指名ス

復任除目日次事、可被相尋在音候歟、謹言、

六月三日　嗣房

師茂ノ書狀

長官觸穢事候之間、如此其沙汰候也、

師茂日時勘文用意幷ニ上卿沙汰ノコトヲ嗣房ニ觸ル

可被行復任除目之由、被仰下候、今月中日次、隨所在(見カ)可令注進給候也、恐々謹言、

六月三日　師茂

權陰陽博士殿

在音ノ答狀

銘在音、

可被行復任除目日次事、來五日丁酉、廿二日甲寅吉候、此兩日之外、今月中吉日難得候、恐々謹言、

六月三日　在音

復任除目日次事、相尋在音候之處、注進如此候、可有御披露候哉、日次治定候者、勘文可用意仕候、上卿以下任例可有申御沙汰候哉、恐惶謹言、

六月三日　師茂狀

春日殿

九日、辛丑、天陰時々雨下、〇略下

(頭書)今日(四カ)一條中納言隆家可補歷、直改被遣之了、

隆家書狀
坊城俊冬
日野時光
柳原忠光
等細ヲ申
子細故障ノ
ス今月中
ス今月中
シセラレタ宥用沙汰ニ

十九日、辛亥、天陰雨下、時々休、申剋許雷鳴、入夜亥刻已後雨止、今日四條中納言隆家卿、進狀於家君云、後任事、來廿二日可申沙汰之由、右中辨示送候、上卿（雖下同ジ）事、內々先相語坊城中納言（俊冬）、藤中納言（日野時光）、右衞門督等（細川忠光）候處、各申子細、此上可延引（脫カ）候歟、今月中日次難得之由、先日承候、來廿九日無指難者、被宥用之條、可爲何樣候哉、可被尋問陰陽寮候歟、聊忿存子細候之間、今月中相構有沙汰條、尤爲悅候、抑中納言家成卿、保延二年八月十四日遭父喪候、後任月日無所見候、被引勸候乎、兵部卿隆親卿、嘉祿三年遭母喪候、不注置何月日候哉、於後任者、五月廿五日之由所見候、兩條可勸承候云々、載請文被答了、注裏、○下略

（裏書）兵部卿母歸寂月日不審候也、

復任事、來廿二日可申沙汰之由、右中辨示送候、上卿事、內々先相語坊城中納言、藤中納言、右衞門督等候之處、各申子細候、此上可延引候歟、今月中日次難治（得カ）之由、先日承候、來廿九日無指難者、被宥用之條、可爲何樣候哉、可被尋問陰陽寮候歟、聊忿存子細候之間、今月中相構有沙汰之條、尤爲悅候、抑中納言家成卿、保延二年八月十四日遭父喪候、復任月日無所見候、被引勸候乎、兵部卿隆親卿、嘉祿三年遭母喪候、不注置何月日候、於復任者、五月廿五日之由所見候、兩條可勸承候、恐々謹言、

六月十九日　隆家

表書　四位大外記殿

師茂ノ返狀

御復任事、來廿二日可申沙汰之由、藏人右中辨令申候之條、目出候、被下御教書、勸文任例可用意候、若依上卿不參延引候者、今月中日次難得由、先日在音雖令申候、廿九日事、重相尋可申入候歟、且此分可仰師茂候之旨、可有御和讒奉行職事候哉、

抑中納言（家成）敍保延二年□（八カ）月十四日御服解之條、無子細候、

御復任事、無所見候、同年十月十五日敍從三位給、（元左京大夫、左馬頭、播磨守、）若不及御復任□□候哉、兵部卿家、嘉祿三年服解、月日事無所見候、五月廿五日、雖被行復任除目候、彼度復任事、無所見候、且同年五月十四日、故法皇（後高倉）御國忌免者、被參陣（于時參議、右衞門督、別當、）由、師季朝臣記分明候、尤不審存候、每事可參入言上候、師茂恐惶謹言、

六月十九日　師茂狀

疾ヲ以テ拒ムム　佐々木氏賴書ヲ馳セテ奮起ヲ迫ル

是月、義詮、圓旨別源ヲ、建仁寺住持ト爲ス、

〔東海一漚別集〕銘　洞春菴別源禪師定光塔銘一作日本故建仁別源和尚塔銘并序

○略上　師諱圓旨、字別源、自稱縱性、越州平氏之子、母以無子、懇禱之藥師佛、一夕夢呑明珠乃有身、既產無惱、實永仁二年歲次甲午冬十月二十四日也、○略中　貞治三年六月、建仁公命至、以疾拒之、越之太守、擅授令就、又佐々木判官(氏頼)爲禪律二敎總管、馳書縱叟迫、不獲已、承公命、力疾匡徒、不倦槌拂、秋九月重陽上堂、顧左右作偈曰、籬邊不見白衣客、爭得淵明興味闌、今日黃花應咲我、白頭扶病上東山、○略下

〔東海一漚集〕二疏　別源住建仁諸山疏

圓月ノ諸山疏

峻整擧似、有句無句、句句超宗、邁騰提拈、築著磕著、著著出格、嗟繇方今人心淡薄、馴致乃往佛道陵夷、苟能一旦振綱、便見四方取則、某人、行解相應、見聞極淵、壯歲遊方江南、驗過數員善知識、比年歸隱越北、旺化一國都會人綿密工夫、龍梭細吐氷縷、痛快作略、鐵撥高彈鵾絃、截鐵斬釘、去粘解縛、意剗句句剗意句交馳、偏中正中偏、偏正正回互、檀信重九鼎、隣封望分光、急著一鞭、勿駐四馬、

〔建仁寺住持位次簿〕○山城　四十四世別源和尚　名圓旨、嗣東明日、貞治三年甲辰六月入寺、同年十月十日寂、洞春菴、

四十四世

十州管内禪敎諸刹ヲ統ブ　禪律二敎總管　宣政院

是夏、北朝、足利基氏ニ令シテ、禪律ノ奉行人ヲ鎌倉ニ置キ、關東ノ諸寺ヲ管理セシム、

〔空華集〕十九疏　仙竺心住長樂江湖疏

貞治甲辰、夏、朝廷有旨、關東幙府始置行宣政院、以十州管内禪敎諸刹屬焉、下○略、足利基氏、竺心ヲ、上野長樂寺住持トナスコトニカヽル、十月十二日ノ條ニ收ム、

〔空華日用工夫略集〕貞治三年、甲辰、夏有朝旨、關東幙府始置行宣政院、以十州管内禪敎諸刹系焉、

○行宣政院設置ノコト、他ニ所見ナシ、蓋シ禪律ノ奉行人ノコトヲ元ノ官制ニ配シテ、譯シタル稱ナルベシ、

〔參考〕

〔東海一漚集〕銘　洞春菴別源禪師定光塔銘一作日本故建仁別源和尙塔銘并序

○上略　貞治三年六月、建仁公命至、以疾拒之、越之太守擅掇令就、又佐々木判官（氏頼）爲禪律二敎總管、馳書縱（囚旨）臾迫、○下略

〔嵩山集〕三　呈宣政院閣下

門墻万仞一儒生、英氣高蟠充八紘、目擊道存人所欲、揮回佛日大光明、

元ニ始メテ宣政院ヲ置ク　朝廷ニ在ルヲ宣政院諸道ニ行ルヲ宣政院トイフ　至元ノ初ノ總制院ヲ置キ後宣政院ト改ム　知事ノ員數ヲ額定ス　常選ノ職官ヲ用フ

〔禪林象器箋〕一區界門　宣政院

朝廷管僧道衙門、此謂宣政院、忠曰、元朝初置之、日本寺社也、○中略

行宣政院

舊說曰、在朝廷曰宣政院、在諸道曰行宣政院、行奉行也、謂遐方州縣、難通治、故置之、奉行宣政院事、○下略

〔元史〕八十七百官志三　宣政院、秩從一品、掌釋敎僧徒及吐蕃之境、而隷治之、遇吐蕃有事、則爲分院往鎭、亦別有印、如大征伐、則會樞府議、其用人、則自爲選、其爲選、則軍民通攝、僧俗竝用、至元初、立總制院、而領以國師、二十五年、因唐制、吐蕃來朝、見於宣政殿之、故更名宣政院、○下略

〔敕修百丈清規〕四兩序章第六　泰定間、脫歡丞相、領行宣政院、分上中下三等寺院、額定歲、請知事員數、正爲此也、○上下略

〔笑隱訢和尙行道記〕江浙行省丞相脫歡公、故荅剌罕順德王之子也、以世勛、名德靖重、知大體、兼行宣政院事、領東南浮圖之敎、凡大刹、非名德不輕授、

〔佛祖歷代通載〕二十　戊午（延祐五年）、是年六月、再立行宣政院、參用常選職官、○中略

戊辰（天曆元年）、九月十四日卽位、年改致和、爲天曆元年、禮公歌羅亦中納思監藏班藏卜文國公爲師、是年革行宣政院、設

十六處廣教總管府ヲ設ク

立十六處廣教總管府、以攝僧、

〔太平記〕三十　直義京都退去事

抑是ハ誰意見ニ依テ、高倉殿ハ、加様ニ兄弟叔父姪ノ間、合體〇參考太平記ニ、本文誤作合ニ、戰、今依毛利家本改之トアリ、ヲシナカラ、サスカ無道ヲ誅シテ、世ヲ鎮メナントスル所ヲ、計ヒ給フト尋レハ、禪律ノ奉行ニテ召仕ハレケル南家儒者藤原少納言有範カ、〇參考太平記ニ、民部卿藤範子トアリ、時々申ケル議ヲ用ヒ給ヒケル故トソ承ル、〇上下略

禪律ノ奉行

〔花營三代記〕應安元年二月十九日、禪律內談始行於御所、管領佐々木大夫判官入道、

禪律內談

閏六月廿一日、禪律內談始行於御所、

應安三年九月二日、澁川武州禪門京著、一方內談頭人今川與州禪門、[illegible]被仰吉見右馬頭入道之處、領狀云云、禪律方頭人事、被仰赤松律師坊之處、同前、

禪律方頭人

〔武家名目抄〕三十三職名部十九之二　〇上略　武家の禪律におけるは、公家の顯密におけるかことくなれり、故に住持の請待、寺地の寄捨悉く武家の進止にあつからさることなかりき、足利殿も亦此教を崇敬ありしかは、引付頭人

引付頭人ノ中ヨリ禪律方頭

人ヲ定メ奉行人中ヨリ禪律奉行ヲ置ク

住持移轉及ビ法儀等ノ事ヲ沙汰セシム

の內より、禪律方の頭人を定め、奉行人より禪律奉行を置れて、住持移轉及法儀等の事を沙汰せしめたり、たまさかこれを住持奉行ともいひしは、卽住職の事を奉行する故なり、一宗の法儀定まりし後は、更に此奉行を置るゝ事を止められ、寺奉行の內にて、五山十刹等の諸事を分ち預りて、庶事を沙汰することゝなれり、又關東にも、京都の制にならひ、足利氏滿在職の頃より、禪律奉行を定めて、鎌倉五山以下禪律の庶務を攝せしめたり、されと所見多からされは、その廢置等の始末は詳に辨し難し、

七月小　盡
癸亥朔

一日、癸亥、西園寺公重、祖先實兼ノ家督置文ヲ、後村上天皇ノ叡覽ニ供ヘ、家督ヲ、子實長ニ讓ル、

〔西園寺家記錄〕十三
（編輯者）「實衡家督之事　妙音院之ト狀アリ」

家督ノ事

□奉任（仕カ）春日大明神之□□□□□□□□□□□□□□□□□折□□□□□□□也、□

定　家門條々事

一家督事

權大納言實衡（西園寺）卿、爲其仁、先年既委附故入道（公衡）□□□□□春宮權大夫兼（菊亭）季卿未擧□□□□子等有之、生來爲令繼□□□事作法者、可相談（今出川公顯）右府幷兼季卿等、於內辨官奏敍位除目等之大事、故可受口傳、如然事、可相訪便宜之攝關家、且當家先例也、□（家カ）務事、大小事、可示合兼季卿、□□□□□□□□□高年、未擧一子、當時三歲男子一人有之由、依傳聞、爲予（實兼）計、雖授名字（今出川）實顯、令敍爵、始終之運不知之、兼季卿又于今無一子、仍以彼卿、可爲右府（公顯）之嫡子、以□（勝カ）實顯、□（勝カ）兼季卿子、縮兩家可爲一流、父之所經歷之官職、繼其蹤跡者、諸家之通規也、然則兼季卿昇進事、至大臣大將、右府加內擧、可申沙汰、兼季、實衡兩卿昇進前後事、可依當時座次、此上依事之遲速□□者、可在時儀、凡不被失家督之正流之條、專仰上計者也、家族又可存之、

日記文書等ノ事

一日記文書等事

所納北山文庫之景（マヽ）家日記次第、諸家記、雜文書等、可爲實衡卿沙汰、子子孫所謂右府、兼季、實衡、季衡等卿、悉可令見之、各有書寫志者、同所許之也、更不可有停止、其外故入道（公衡）左府記幷料所□置之文書等、雖爲實衡卿之進止、右府幷兼季卿有可見事者、隨所尋可令見之、且爲相談公事、無停止附見之條、旁可然歟、且此由加誓言載狀、不可違犯之旨、示合實衡卿畢、但至故左府入道日記文書者、可許書寫否、可在實衡卿之進止也、於公事之次第抄物等者、雖書寫、不可停止者歟、

北山文庫

□（頭書）記依大相國所進一見之、偏爲報國之忠相、連々明鏡、家門於此記者、之（マヽ）重寶不可過之、雖沙汰、輙不可許一見、手書家村（マヽ）見、幾可作專全家門、可叶

朝要之故也、

正平十九年三月廿三日、重一見此置文之次、不堪懇欵、無不(左カ)右注付之、

出仕雜具ノ事

一出仕雜具等事

車、劔、平緒、帶、笏、褻晴、鞍、鞦等有餘分者、追可計分子(于カ)庶子等、其間者、爲實衡卿計、次第可緒遣之、晴出仕時扈從輩或難去之、如親昵有借用事者、自身不指合之時、相談實衡卿可遣之、但不事嚴之時、不可聊爾、依爲紛失之基故也、

西園寺幷ニ北山屋ノ事

一西園寺幷北山屋事（同領内在山林用地等、）

可爲實衡卿沙汰、但有要時寄宿事、雖庶子等許之、相談實衡卿、可隨許容、又有申入永福門院(鏡子)之旨、定有御計歟、當寺別院諸堂等勤行幷供料已下事、予方歲(方カ)之後、彌定懈怠不法事有之歟、常尋問之、可致嚴密之催促、此等事必不可待實衡卿之與奪、依予之遺命、兼季卿道意僧正（當寺々務）相談、可計沙汰、諸堂幷屋々修理事、定置析足之上者、彼兩人一向可執行、至此段者、實衡卿更不可確執、倩鑒察未來、實衡卿一人自專沙汰、不心安之間、相互同志可計沙汰、家門安危亦可依此事之故也、所役庄々、（宇和山代已下寺役沙汰進止之所々、）雜掌等致自由之難厚、有不法懈怠事者、兼季卿道意僧正等相談、相觸實衡卿、可改之、私沙汰若有難治事者、申入永福門院、可隨御計、是併恐伽藍之冥鑒、顧列祖之意意(所カ)誡置也、云子孫、云家僕、誰人背遺命乎、實衡卿若任僻案違愚命者、烈祖之冥慮尤爲恐者也、

雜治ノ事ハ永福門院ノ計ニ隨フベシ

所(固カ)定置之料足低弱、不可及九牛之一毛歟、於己亥、壬刁等修治、爲修理料足事、可申合關東也、實衡一身成敗可足者、不能左右、若有無沙汰事者、兩人可計沙汰、所詮爲全家門之修治也、

家人等ノ事

一家人等事

諸大夫侍等已下至重代之下部等、以家督人可爲本之條、不能左右、但此內外樣、可召仕之輩等、各別相計其器量、雖可分庶子等、各非皆所許兼參也、（右府、兼季、實衡、季衡等卿之間也、）此內隨恩之多少、依志之有無、取分召仕之、或致勤厚之輩、是又非無其理之上者、相互不可塞之、元來家僕等人數不幾、恩顧又難合期歟、兼參之條、旁可宜乎、如公事方々可指合時者、面々相談可被進止歟、此外取分所召仕之恪勤輩者、非此限、兼參還可同、難治如此之類八、不及沙汰者也、

已上文保元年所定置也、

妙音院ノ事

一妙音院事（元亨二年七月書加之、）

遠江濱松莊ハ妙音院領

任予例實衡卿可執沙汰、於寺領等者、爲予計、各別知行之輩可有之、此儀不可相違者也、但是不可爲始終之別相傳、或一兩代、或當時之知行許也、實衡卿以後、雖子孫、學四絃之道、可管領院家也、別相傳之寺領果役事、惣寺領等、悉臨時支配役者、各可致沙汰、爲避逅之役者、課役及廣者、募年貢之由、可沙汰之、於小事者、爲預所之臨時役可宛之、於許別知行之輩者、於私家臨時役者、不可宛之、當時奉安置西園寺南廊、仍修理已下事、可爲惣寺家之沙汰、工方事、檜皮事、正面透障子、聽聞所廻御簾等、等可爲西園寺方々沙汰、內陣鋪役并道具佛具等ハ可支配、妙音院領越前富田庄、雖讓堀川二品禪尼、於傍庄一圓之臨時役者、可勤之、遠江國濱松庄、可爲妙音院領之由、去月被下綸旨訖、同可致其沙汰也、

右條々大概所定如斯、凡當家子孫、携四絃秀管絃者、隨便宜之管領院家之條、可在妙音天之冥慮、各殊可尊崇當院者也、者愚存之旨記之狀如件、

元亨二年七月二十三日　御判

「當院事、殊可有崇敬、興行之沙汰規式等、專可被用此置文者也」

此狀中書也、追可淸書、其以前以之擬正文、

宸翰ヲ賜フ三品貞子

已上八枚、每續目封裏判形七也、　御判

御裏書

妙音院事、可書別狀之、而病蒙之間失念、仍書連之了、

自此枚奥、後日書之、依爲病中、旨趣文章彌不合期、頗度々後見、尤可憚者也、

正平甲辰歲重備上覽之刻、所被刻宸翰也、子孫專可存此旨、抑三品貞子事、預爲正室上者、任先規、殊可存至孝之儀、就中此夫婦事、非自然之因緣、綺起後醍醐天皇叡慮之、舊來方有子細之故也、然者了長朝臣可爲家督之由事、就事書悉皆附屬先訖、爰件三品不變貞女之志、予閉眼之後、守貴誡之趣、草堂之懃行、戒行之律儀、不相違者、一後管領之地、守讓狀之旨、可然知行、若少事背遺命之子細等有之者、雖一處、不有管領之儀、此子細就讓狀之旨者、專存其旨、奴々不可違失之狀、所定如件、

正平十九年七月一日　太政大臣藤原朝臣　御判

〔參考〕

〔尊卑分脈〕藤原氏　西園寺　公季孫

南朝正平十九年　北朝貞治三年七月一日

實兼　太政大臣、內大臣、春宮大夫、從一位、右大將、母大外記師朝女、正安元六廿四出家、法名空性、元亨二九十薨、七十四、號後西園寺入道相國、

公衡　左大臣、右近大將、中宮大夫、左衞門督、從一位、檢別當、母內大臣通成女、從一位顯子、應長元八廿出家、靜勝、正和四九廿五薨、五十二、先父公號竹林院、左府、

公顯　右大臣、從一位、春宮大夫、右衞門督、檢別當、母內大臣師繼公女、元應三二八薨、卌八、號今出河、

兼季　右大臣、從一位、右大將、左衞門督、春宮權大夫、檢別當、母家女房、曆應元十二十二出家、法名覺靜、同二年正十六薨、五十五、號今出河、又號菊亭、頭

女子　鐘子、從三位、永福門院、母同公衡公、

實顯　參候南朝、早世、母家女房、菅原在綱朝臣女、

季衡　內大臣、從一位、左大將、中宮大夫、左衞督、（門脫カ）母家女房、左馬頭光保女、正慶二二十三出家、法名空勝、

實衡　內大臣、正二位、右大將、中宮大夫、左衞門督、檢別當、母權大納言經任卿女、嘉曆元十一十八薨、卌八、

公宗　權大納言、春宮大夫、中宮大夫、兵部卿、正二位、母爲世卿女、昭訓門院、春日局、建武二八二被誅、依天下叛也、

公重　內大臣、正二位、左大將、春宮大夫、左兵衞督、參候南朝、母家女房、號竹林院、

實長　權中納言、禁、正三位、參候南朝、早世、母、

南朝ニ候ス

北黨武田氏信、勳功ノ賞トシテ、安藝禰村地頭職ヲ、熊谷直道ニ、同ジク內宮莊地頭職ヲ、同乘蓮ニ預ク、

〔熊谷文書〕一

安藝國禰村地頭職事、依有軍忠所預置也、任先例、可被致其沙汰之狀如件、

貞治三年七月一日　　前伊豆守（武田氏信）（花押）

熊谷尾張入道（直道）殿

〔熊谷文書〕三

安藝國山縣郡內宮庄地頭職事、爲勳功之賞、雖爲拜領之地、依有軍忠、先所預置也、以治定之闕所之地、追可致替之沙汰之狀如件、

貞治三年七月一日　　前伊豆守（花押）

熊谷彥四郎（乘蓮）入道殿

○氏信、乘蓮ニ戰功ノ賞トシテ、安藝國內ノ地ヲ預クルコト、文和元年十二月二十七日ノ條ニ見ユ、

二日、（甲子）義詮、上杉朝顯ノ所領ヲ安堵セシム、

〔上杉文書〕六

本知行之地、如元不可有相違之狀如件、

貞治三年七月二日　　（義詮）（花押）

上杉中務（朝顯）大輔殿

兵粮料所ト號シテ押妨ス

四日、丙寅、北朝、廣瀨龍田祭ヲ延引ス、

〔師守記〕三十八帝國圖書館本　七月四日、丙寅、天晴、辰剋細雨下、午剋又小雨灑、

○下略

今日廣瀨龍田祭延引、(マヽ)、無被仰、

幕府、大内弘世ヲシテ、東寺領周防美和莊内兼行方ノ押妨ヲ停メ、下地ヲ同寺雜掌光信ニ交付セシム、

〔東寺百合文書〕ノ一之八　○山城

此正文者國人下遣了、

東寺雜掌光信申周防國美和庄内兼行方事、訴狀副具書、如此、子細見狀、當寺崇敬異于他之處、號兵粮料所押妨云々、太不可然、不日止彼妨、沙汰付下地於寺家雜掌、可被執進請取狀、若猶不敍用者、載起請之詞、急速可被注申、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

貞治三年七月四日　　左近將監(別筆「實名義高」)判

大内介(弘世)殿

〔東寺百合文書〕さ四十之五十　○山城

(端裏書)「雜掌重狀　貞治三十一廿八」

光信ノ重訴狀

東寺雜掌光信重言上、

欲早先度御奉書守護未遵行上者、重被成下嚴密御奉書、被止兵粮粁所儀、被沙汰付雜掌於地下、當寺領周防國美和庄内兼行方事、

副進

一通　官符案

一通　關東御施行案

已上先進畢、

一通　御奉書案　貞治三年七月四日、

右子細先度言上事舊畢、所詮今年七月四日雖被成下御奉書、于今未遵(遵カ)行之上者、重被成嚴密御敎書、爲被沙汰居雜掌於地下、重言上如件、

貞治三年十一月　日

幕府ノ催促狀

〔東寺百合文書〕ホ一之二十　○山城

東寺雜掌申周防國美和庄内兼行方事、重訴狀副具書、如此、當寺崇敬異于他之間、可止兵粮料所之號由、先度被仰之處、不事行云々、何樣事哉、頗招其咎歟、早休彼妨、來正月十日以前、沙汰付下地於寺家雜掌、可被執進請取狀、猶以不承

事行ハザレバ罪科ヲ招ク

引者、爲處罪科、載起請之詞、急速可被注申、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

貞治三年十二月四日　　左近將監(義高)(花押)

大内介殿

〔東寺百合文書〕さ　○山城　四十之五十上

(端裏書)「兼行方事」

目安

東寺雜掌申

周防國美和庄内兼行方事

右當所者、當寺講堂長日仁王經法并八幡宮理趣三昧已下六箇御願析足也、仍可被渡下地於寺家雜掌之旨、去年被成御教書(案文進覽之)之處、九州不屬靜謐之程者、國中所領事、自公方不可有御錯(綺カ)之旨、御兼約之間、不可依御教書之由、守護代依被支申之、先所閣公方訴訟也、所詮當所者、雖爲寂狹少之地、自往古爲長日重色析足之處、近年及闕如之間、寺家所司等殊所歎申之也、以別儀渡給之者、尤可爲一寺御興隆、然者別而可奉致守護御方御祈禱之精誠者也、仍目安狀如件、

雜掌ノ目安

長日仁王經法八幡宮理趣三昧已下六箇御願析足ノ料

別儀ヲ以渡給ハラバ寺興隆シタルベシ

貞治四年六月　日

○幕府、曾我時長ノ、東寺領周防美和莊内兼行方年貢ヲ抑留スルヲ停メ、之ヲ究濟セシムルコト、貞和五年十二月二十四日ノ條ニ見ユ、

五日、丁卯、河野通盛、置文ヲ下シ、伊豫善應寺住持職ヲ、土雲(南山)門徒ノ支配タラシム、

〔善應寺文書〕(乾)　○伊豫

伊豫國善應寺住持職事

爲南(土雲)山和尚門徒寺、至于後々末代、不可有違變之儀者也、仍置文之狀如件、

貞治三年七月五日　　善惠(河野通盛)(花押)

善應寺正(土雲)堂和尚

伊豫國善應寺住持職事

任貞治三年七月五日善惠之置文之旨、爲南山和尚門徒寺、永代不可有改變之儀者也、仍爲後證、置文之狀如件、

貞治三年七月廿五日　　遠江守通朝(河野)(花押)

善應寺正堂和尚

○義詮、通盛ノ請ニ依リ、善應寺ヲ諸山ノ列ニ加フルコト、五月三日ノ條ニ、通盛ノ卒スルコト、十一月二十六日ノ條ニ見ユ、

六日、戊辰、北朝記錄所庭中及ビ雜訴沙汰、

〔師守記〕○三十八帝國圖書館本　七月四日、丙寅、天晴、○中略今日召次有末持來廻文、來六日庭中式日之上、可有沙汰事云々、家君予申領狀、

是日明後日記錄所沙汰事、被尋問頭卿信兼朝臣之□（惡カ）他行云々、此次家君以狀、明後日出仕事、被尋左中辨行知朝臣、若無出仕者、袍、大帷、可借賜之旨也、他行之間、於路次、使者付狀之處、咳氣未得減之間、明後日不定、袍大帷事、雖下品候、可被召之由、以詞有返事、今夕家君以狀被示掃部頭云、袍大帷事尋出候、明夕可進之趣也、

（裏書）剋限可爲辰一點、各殊可被存知、

四位大史故障候、　四位大外記故障攜得者、可參仕候、

刑部卿　大學頭

中大外記　大夫史奉

廻文

師守不具ニ依リテ不參仕ノ人々

出御

庭中一箇條新西宮神主職ノ事

主稅頭　掃部頭

博士大夫判官　大博士故障攜得者、可參仕候、

大判事故障攜得者、可參仕候、

右來六日庭中式日之上、可有沙汰事、各如法辰一點可被參記錄所之狀、所廻如件、

貞治三年七月三日

六日、戊辰、天晴、○中略辰剋、家君著朝衣、花田鬘、女郎花鬘、被沙汰出之故也、未參記錄所、給依庭中式日之上、可有沙汰事也、予不具不參仕、尤爲恐、寄人四位大外記家君、端座、大夫史量實、束帶、奥座、開閤、番、掃部頭師香、衣冠、奥座、家君次、大博士宗季、衣冠、奥座、量實次、大判事明宗、衣冠、端座、師香次、番、等參仕、明宗直著到日之後、自上首書名字、

未剋出御、傳奏大宰權帥仲房卿、端座、直衣、奥下紐、藤中納言時光卿、同端、右衞門督忠光卿同、等著座、庭中一ヶ條也、御房丸申新西宮神主職事、越訴上卿中御門大納言當時無出仕之間、不及御沙汰、急速可有御沙汰之趣也、明宗取目六不及奏聞、帥卿加問答被返了、所詮可相尋上卿出仕云々、其後入御庭中之後、有評定沙汰事、

山城市邊稲田ノ事

大炊寮與平野社神主兼前宿禰相論山城國市邊御稲田事

兼前宿禰出對兩度難澁之間、以一方寮家雜掌答申所、評定之時、家君退出給今日被行雜訴沙汰、帥卿藤黄門右金吾等也、職事頭宮内卿信兼朝臣、藏人右少辨仲光等參仕云々、

（裏書）師茂　重實（俗カ）番、

師香　宗季

明宗番、

記錄所　著座

大宰權帥

藤中納言

右衞門督

貞治三年七月六日庭中

仰、可相待上卿出仕矣、

御房丸申新西宮神主職事

花山院長賢ノ和歌

繫米葉書朗詠七夕詩歌

索餅

七日、己巳、南朝行宮和歌御會、

〔新葉和歌集〕十三戀歌三　正平十九年七月七日、内裏ゐて三首歌講せら給し時、七夕戀といふ事を、　權中納言長賢

いつ〻りれ末こそ忘ら給頼めつる夕いれゐし星なひけそら

〔參考〕

〔新葉集作者部類〕中納言　權中納言長賢花山院藤家賢男、長親弟、　四首

新葉集哀傷部、長親母及妙光寺内大臣母歌詞書、長賢卒後詠之、以彼歌考之、

北朝乞巧奠、

〔師守記〕三十八帝國圖書館本　七月七日、己巳、天晴、○中略今朝繫葉書朗詠、七夕詩歌、上屋上如例、愚息大炊權助師豐（中將）同前、

今日節供、不及沙汰、御粟園索餅許如形有之、予方自大方有索餅、幸甚々々、

今日記錄所召次不及申節供、寮不具歟、○中略

今日内御方御節供不及沙汰、兼日無被仰之間、近年之儀也、○下略

（頭書）今日□（乞）巧奠□□云々、

麥粉則被賦之□也、師豐分一土器賜之、

光嚴法皇、丹波山國莊常照寺ニ崩ジ給フ、

〔迎陽記〕○德川昭武氏本　貞治三年七月七日、己巳、晝間天陰、晩頭雨降、依召參殿中、今夜丑刻法皇於丹波國山國莊內常照寺、（故景繁建立寺、元號成就寺云々、）今日晏駕給、上下驚歎筆墨難述、近年更拋擲浮俗之事、偏歸依單傳之宗給、朝夕御勤行、古今無斯比類、因彼御窮屈、去月上旬、有御不豫之氣、疫疾云々、十日比聊御減、次第御本復之間、珍重之處、又自同廿六日御再發、玉饌令違給、遂答平生御安心、忽入無餘大涅槃、御聖算五十二云々、

〔師守記〕○三十八帝國圖書館本　七月三日、乙丑、天陰、今曉卯剋降雨則止、申斜細雨下、酉剋又小雨下、入夜戌剋又降雨、其後終夜不絕、今日法皇寺長老來臨、被語云、昨日法皇（當今御嚴親、）於丹州崩御之由風聞候、驚存云々、家君未觸耳、如先例、可被尋下之處、無其儀旨被答、其後長老被歸了、則以狀被尋大判事明宗之處、勘付云、御惱危急之由有其說、隨而昨朝爲黃門（日野時光卿、）奉行、八万四千基石塔被立之、被相尋之趣也、崩御事未不存知、若實事才學候者、雖何時、可馳申之由也、○下略、

單傳ノ宗ニ歸依シ給フ六月上旬ヨリ御不豫一時御減退同二十六日御再發

御惱平癒ノ爲八千基ノ萬四石塔婆ヲ立テラルヽ

四日、丙寅、天晴、辰剋細雨下、午剋又小雨灑、今朝予以狀法皇御事、無其儀之由、令申法皇寺長老宿之處、不及返事、可參云々、今日法皇寺長老來臨、法皇御事不實、御惱煩敷御座之由有其聞、其子細歎申之處、定又被聞食歟之間、遣愚意云々、○下略

六日、戊辰、天晴、○中略　家君自記錄所退出之次、令向四條中納言隆家卿第、從是始流布御勢、其後御痢病、御不食云々、御大事出來者、天下諒闇勿論云々、次參向勸修寺一品（經顯）第給、法皇御惱事被驚申、以子息播磨守被聽之、其後參殿下、御風呂時分云々、次法性寺中將（觀春）觀春、法皇御惱事被驚申之、其後歸宅給、

於記錄所、法皇御惱□□□□者、天下□（諒カ）闇之□（略カ）勿論□□□事□□也、

七日、己巳、天晴、入夜戌剋天陰、雨下、終夜不絕、寅剋以後休、○中略　今夜丑剋太上法皇崩御、（御年五十二、）多年御遁世之儀、（御禪躰也、）仍於丹波國小庵崩給、自四月比流布御惱及兩三度、其後御不食云々、天下諒闇之條勿論也、

八日、庚午、天晴、○中略

御痢病御不食

多年御遁世ノ御禪體ヨリ四月頃ヨリ御惱ノ由流布ス

諒闇間事、條々相搆可注給候、自是可進給候、

喜承了、

此間久不言上仕候、貴邊何條御事御坐候哉、抑法皇御方御惱事、殊驚存候、（昨日丑剋御崩御之由、今日巳剋御使告來候、言語不及候、不能是非候、恐々謹言、）

尤可參申上候之處、師守此間痢病所勞候之間、（忠光）一昨日記錄所御沙汰、不參仕候、仍捧愚狀候、恐存候、以便宜加御詞、內々御披露候者畏存候、又仙洞御參之次、同驚申上之趣、得御意候者畏入候、且其後何樣御候哉、無御心本存候、蒙仰候者畏存候、每事可參入言上候、師守恐惶謹言、

七月八日　　師守（上）

人々御中

（頭書）今朝予以狀法皇御惱事被尋之處、去夜丑剋御事、今朝巳剋御使到來之由有返事、

〔柳原家記錄〕（二十七 敦有卿記）　七月七日、太上法皇崩于山國御菴室、（略）○下

〔東寺執行日記〕一　七月九日、（天曆）同、法皇（本院御事、禪僧ニナラセヲワシマス、號申光嚴院、亦奉稱上方、）去七日丑剋崩御、於丹波國御圓寂、當今御親父也、武家沙汰被止之、（略）○下

〔大乘院日記目錄〕一　七月七日、光嚴院崩於丹波國山中也、（五十二、）

〔建長寺年代記〕（坤 ○相模）　甲辰（貞治三、）奏新拾遺集、七ノ七ニ光嚴崩ス、（○歷代皇記、興福寺略年代記、和漢合符等、異事ナシ、）

〔常樂記〕七月八日、（光嚴院）伏見大法皇薨御（御年五十二、）於丹波山國、

〔續史愚抄〕（二十六 後光嚴院）　七月二日、甲子、新法皇（本院、）於丹波國御惱增氣由有其聞、（自去月上旬令病疫給云、）因爲御平愈勅願、被立八万四千基石塔於所々、奉行藤中納言（時光、夏記、或記、）師（光、）

〔太平記〕（三十九 前○四田家十本）　光嚴法皇行脚（附）崩御事

（○上略、光嚴法皇行脚ノコトニカヘ、貞治元年九月一日ノ條ニ收ム、）

ク御座有ケルカ、中使（○西源院本、宣使ニ作ル、）頻ニ到テ、松風ノ夢ヲ破リ、舊臣常ニ參テ、蘿月ノ寂ヲ妨ケル程ニ、此モ今ハ住憂ト思召、丹波國山國ト云所ヘ、跡ヲ（○西源院本、跡ヲノ二字ナシ、）銷テ（○前田家本、銷テソニ作ル、）移ラセ給ヒケル、山菓落庭朝、三食飽秋風、柴火宿爐夜、薄衣防寒氣、吟肩骨瘦テ泉ヲ擔ニ慵トキハ、石鼎ニ雪ヲ湘テ、三椀茶淸風ヲ飮、（○前田家本、西源院本、領シニ作ル、）仄步（○西源院本、厥步ニ作ル、）山嶮シテ蕨ヲ折ニ倦トキハ、岩窓ニ梅ヲ嚼テ、一聯句閑味ヲ甘（アマナヒ、○西源院本、甘ノ字ナシ、）給フ、身ノ安ヲ得ル處卽心安シ、出有江湖、入有山川ト、一乾坤ノ（○西源院本、一ノ字ナシ、）外ニ逍遙シテ、破蒲團ノ上ニ光陰ヲ送ラセ給ヒケルカ、翌年（○參考太平記ニ、今川家、毛利家本、有貞治三年字爲得トアリ、）夏比ヨリ、俄

御抖擻ノ後、光嚴院ヘ御歸リ、尋テ丹波國ニ入給フ

八日崩御ノ說

御遺誡

ニ御不豫ノ事有テ、遂ニ七月七日ニ（○参考太平記ニ、西源院本作二日、恐非也トアリ、）隱サセ給ヒケリ、（○下略）

〔常照寺記錄〕（○波丹）　大雄山常照禪寺開山法皇遺誡

一老僧滅後、莫傚尋常須作茶毗等儀、只須密就山阿收瘞、松栢生於塚上、風雲時往來者、是予好賓、甚所愛也、如其山民村童、□□聚□戲緣構小塔亦不及禁之、此一節只爲不勞動衆人耳、其或便於省力、則火葬亦可、一切法事不須爲之、

一中陰佛事□必也、卜一場□一衆、專修大圓覺之場、是修予追福之場也、堅持佛禁戒人、是修予追福之人也、中□及大小祥□忌辰、除靈供諷經之外、不用更營齋會、倘於老僧、存一分追修報恩之忌（志カ）、在□□□疎之中□以辨道、是吾所庶幾、千萬足矣、若別有檀信□□物爲忌齋者、先須□□□□□□餘則宜補當寺資緣、是所以護借常住也、莫謂必傚數多點心、數多□品□□以形告也、勉之、

御事歷

〔皇年代略記〕（他流踐祚諱量仁、後伏見第一皇子、母廣光嚴院義門院、入道左大臣公衡女、）　在位二年　正和二年

（癸丑、）七月九日（卯時、）誕生、八月十七日立親王、一、嘉曆元年七月廿四日立太子、十四、元德元年十二月二十八日元服、（十七、紫宸殿儀、加冠傳（傅）右大臣經忠、理髮權大夫權中納言兼左衛門督藤原朝臣冬信、）

元弘元年（辛未）九月廿日（癸巳、）踐祚、（十九、被下太上天皇詔命、于時劔璽不渡之、壽永之例也、）十月六日、渡劔璽、（自六波羅奉渡、土御門東洞院皇居、或說神璽聊有仔細云云、）十一月八日、立故皇太子、邦良親王子康仁爲太子、

元弘二年（正元、慶）三月廿二日（辛卯、）即位、（太政官廳、）四月廿八日國郡卜定、十月廿八日（甲子、）御禊、（三條末以北、節下左大臣基嗣、）十一月十三日（己卯、）大嘗會、（近江、丹波、）正慶二年三月十二日主上幷兩院幸於六波羅、（花園、後伏見、）（內侍所同渡御、以北方爲皇居、閏二月以來伯州主出御、天下擾亂之故也、當所探題仲時、時益奉保護了、）五月七日、六波羅城敗績、仲時等、奉伴主上上皇以下、赴東國、（於江州番場、仲時、々益等自刎、三主以下御逗留、）同十日、遷御伊吹山太平護國寺、（暫以此所爲御在所、）兩院以下又同御此寺、此間爲伯州詔命、奉退皇位、（元號又廢、正慶二年又復元弘三年、）同七八日、自江州還幸於京都、十二月十日、被獻太上天皇尊號、（御年（年カ）廿三、）同日被獻隨身兵仗、（左右近將曹、府生、番長各一人、近衛各三人、）建武三年五月廿五日山門行幸、欲被伴申之處、依御惱、不慮御逗留、尊氏卿申沙汰、俄奉入六條殿、六月三日、臨幸八幡、同十四日、還御六條殿、自彼又幸東寺、（以灌頂堂爲御所、）八月十五日、奉伴豐仁親王、幸權大納言良基卿押小路烏丸亭、有立王事、同廿二日、奉伴親（新カ）帝還幸東寺、十二月、還幸持明院殿、觀應二年（三カ）閏二月廿日、依親（新カ）王（主カ）天氣、促仙蹕於八幡軍神（陣カ）、（兩上皇新院幷儲皇直仁等、四ケ所御同車、）五月十一日、遷御於賀名生

大和賀名生ノ離宮ニ遷御

近江ノ太平護國寺ニ遷御

御落飾由良ノ覺明禪衣ヲ著セシメ奉ル

離宮（是新主官軍失利御沒落、被奉伴之）、八月八日、於河州行宮御落飾（四十一、法諱勝光智、御授衣之時、御戒師西大寺光（元カ）、此時御諱上勝一字被止之）、二人（上羅）、延文元年月日、於河州離宮、由良覺明和尚奉令著禪衣、貞治三年甲辰七年二月十八日、奉伴親（新カ）院、出御彼離宮幸伏見殿（其後近邊別處、彼是御經行）、月七日、崩御丹波國山國（春秋五十二）、天下諒闇、以此間御庵號被擬追號、奉號光嚴院、是依遺勅也、

正慶二（元年壬申四月廿日改元、代始）、首書元弘元九廿一、院、新院、自六波羅、遷御常盤井殿、正慶元三三天變、四十三曉、叡山法華堂以下火事、五七、西國軍勢襲來洛中、押寄六波羅合戰、八日、兩院主上御沒落、出御六波羅、武士等供奉、詔、朕恭承帝系、叨握神符、王道難覃、謝德於姬周之賢、庸昧可恥、宣化於夷夏之俗、而皇太子謙讓合道、惠澤普及、今避儲位於青闈之月、伴仙遊於射岫之雲、仍雖無准的之舊蹤、加以禮制崇敬、宜上尊號爲太上天皇、普告遐邇、俾知朕意、主者施行、元弘三年十二月七日、

○伏見宮御記錄、雲上一覽異事ナシ、

〔續神皇正統記〕第九十六代光嚴院（諱ハ量仁、後伏見院第一御子、御母ハ廣寧子）義門院、入道左大臣公衡ノ女也、壬申（元弘二）ノ年卽位、改元して正慶元年とも、同二

儉約ヲ守リ山門南都ニ嚴制ヲ下シ給フ

五條東洞院ニテ騎馬武士ノ暴難ニ遇ヒ給フ

年六月、後醍醐（九十五代）院御入洛の事によりて、主上も御位を退き、東國のおさへ幸も、兩院をもなしまひ申さる、但程なく還幸、十二月、尊號を獻せらるる、詔書に、皇太子今避儲位於青闈之月、伴仙遊於射岫之雲、之文章載らるるけるとゝや、さるとも中二年とあるべして、後醍醐又御沒落ありしかど、光明院御位はあせ給て、天下をたちまちまる躰ふきわさら物給ふ、院中ゐても、文殿乃沙汰嚴密ゐして、儉約れ制あると當世ふ行なれ、山門南都ゐさへ嚴制を下はるゝるとき、光明康永元年九月六日、仙洞持明院殿より伏見殿ふ御幸有、還御の時、五條東洞院ゐて、騎馬乃武士兩三輩はいりあひゝり、召次御牛飼かとゝなりむゝひ、御幸ゐるき下馬せよと誡仰せ申しに、承引きも、恐れゝ儀をゐ申、狼籍ゐをよひ、御車に矢を射ゐけてゐけさ申ぬ、前代未聞の所行ゐこき、はてゝと訖て、無爲ふ還幸なりぬ、後車竹林院大納言公重卿、諸大夫れ馬を先し寄て、乘用供奉ゐ申、彼狼籍人後日ふあらゝ申て、誅戮さられぬる、天命ゐき侍る、崇光勸（眼）應三年、八幡ゐうりし奉り、又賀名生ゐ還御、河内の行宮ゐして御落餝、禪衣を著御、後ゐ毫丹波國山國といふ所ゐて御修行、五十二歲おゝし〳〵（ましカ）ゝ、抑此記は、北畠准后親房卿（當朝ゐても准后の號ゆるさましかり）、南朝の寵臣として錄

出せり、○下略

〔本朝歷代法皇外紀〕正慶皇帝　帝諱量仁、正安（後伏見）之太子、元弘二年三月卽位、在治二年、正慶二年五月、遜謝玉戸、曆應二年、詔師錬住南禪、召對詢法要、未幾再召見、使講所著十勝論、由是始向禪宗、冬勅源尊氏、創建天龍寺、薦元應（後醍醐）皇帝、請疎石爲開山祖、四年、詔元僧竺仙（諱梵仙）住南禪中、使繕錄法語、有旨昇南禪於五山第一刹、康永元年四月、幸西芳寺、從疎石受衣盂、七月、勅疎石、慶八坂塔、二年五月、幸南禪、梵仙對御說法、帝大悅之、賜饌龍床、梵仙辭以雲水無威儀、帝曰、師其加飡毋視朕也、又降綸誥於鎌倉縣司、迎故實朝所奉北天子佛牙舍利於京城、貞和元年八月、慶天龍寺、左梁右欞誌文、諸堂榜額悉洒奎翰、詔疎石開堂、賜金襴紫伽梨、廿九日、幸天龍寺疎石陞座演法、感二星降、二年二月、幸天龍寺、疎石說法、齋罷、使講傳心法要、三年二月、詔志玄、住天龍寺、帝又臨幸、觀應元年二月、召疎石於內道場受戒、授法名勝光知（智力）道、號無範、二年八月、賜疎石以心宗國師宸奎、九月、疎石寢、幸燕親居、視問安否、三年、蒙塵吉野、八月、落髮河州行在所、延文二年、還故都、隱於小倉山、未幾麻衲藤杖、巡禮金剛峯等諸名山、後入丹州山國縣、開創大雄山常照寺、召通徹（號清溪）商量碧岩古則、仍膀禪室曰碧岩、一

師錬ニ法要チ問ハセ給フ

疎石ヨリ衣盂ヲ給フケ受ケ

梵仙ノ說法ヲ給フ

疎石ニ就キテ受戒シ給フ

通徹ト碧巖ノ古則ヲ商量シ

日至猿抱子、鳥啣花之禪語、豁爾有省、通徹附與伽梨以表法信、海珠堂、圓通殿、怡雲庵、茆宇竹簷、聊準擬叢林、貞治三年六月、賜手勅於妙葩、預告遺命、寄賜天龍寺坐禪僧（常牧寮安十六員僧）、齋供、建壽塔於天龍之東、曰金剛院、又遺囑文和（後光厳）帝曰、夫爲人主、踐萬乘、必資十善宿薰、是故聖德太子治國家之法、必以歸敬三寶爲先、這回若不依賴三寶、焉保聖祚於萬代、況當々來世之報乎、諺謂種豆不得穀、眞有故哉、秋七月不豫、自題御容曰、謝有爲報、披無相衣、行住坐臥、千佛威儀、又貽遺誡數條於山中、七月七日崩、五十二歲、

〔智覺普明國師語錄〕二座上　貞治二年七月二十二日、欽奉聖旨、就于梵王山大光明禪寺、恭爲國母光儀（廣義門）門院（後大光明院）、七周御忌辰、○上略嵯峨聖代以後、垂于五百載、曆應年中、今廣儀門院長子太上天皇、特爲後醍醐聖廟、草故龜山行宮、鼎新金僊淨刹、屢詔正覺國師爲開山、不數年間、速成焉、實天下偉觀也、此知皇后當初植德于此地、以待今日矣、○中略伏惟、光嚴院、光明院、十善宿因、萬乘現果、楚王弓賤、未忘天下、香至珠貴、早辨世明、深信無上覺王、乃有法寶能濟困窮、終致脫屣國位、同稱釋氏、現世希有、潤飲野處、固表出塵之風、枯淡淸寥、以資養道之味、昨是天下棠棣、海內蒼生、無不仰恩光、今爲法中

給フ通徹ヲ袈裟信ヲ奉リ法チ表ス

壽塔ヲ建テ金剛院ト云フ

御遺偈

十善ノ宿因

連枝、方外緇流、亦咸挓尊庇、是以天下靡然皆嚮化、如來以佛法付囑、金言終不虛矣、夫如期之事、釋尊說中、因地雖間見之、震旦扶桑開國以來、正爲人主而如斯者、諸典籍中所未曾記也、西天唯無畏三藏一人而已、猗嗟、火中蓮可見、今日事難逢、兄弟家、伏感荷、所以叡願建寺度僧、又自作、高貴者歸道、千歲榜樣之聖恩、內懷慚愧、外肅威儀、念々在般若中者、非啻不負國土恩、亦堪令佛壽命、久住於世、如偈所謂、常在此不滅者也、佛言、僧有三種道尊、德備、化被人天者國師也、禪定攝念、戒行護身者國僧也、徒爾拱手、放逸過時者國賊也、兄弟家、切須念之、復說偈曰、當初大聖昇忉利、象駕今朝又入山、阿闍一聲鐘報曉、睡僊驚起紫雲端、

法印禪惠ニ就テ受法セラル

〔金剛寺聖教類奧書集〕○河内

一竪横抄卷第五疏二本

□□（正平）十九年七月七日、持明院殿法皇江州山里（丹）ト云處ニテ御隱、禪僧ニテ御歲五十二、同九月四日、天野山ニ御骨納奉了、此法皇ハ、無量壽院之上乘房禪惠法□（淨）學頭房有御授法、依御隱ニ印信ヲ有御還也、

同十月十六日禪惠圓寂、

□□□□（嘉永甲子）癸卯三月上旬書寫之、　求法舜惠　卅三

〔本朝皇胤紹運錄〕○飛鳥井家本

御世系

第九十二
後伏見院

第九十六
光嚴院（正和二七九降誕、治二年、諱量仁、母廣義門院、公衡公女、）

正和二八十七立親王、一、嘉曆元七廿四立太子、十四、元德元十二廿八元服、十七、元弘元九廿踐祚、廿、被下太上天皇詔命、于時劔璽不被渡之、蓋壽永例也、同年十六、渡劔璽（自六波羅奉渡）、土御門東洞院殿、同年十一八、立故皇太子邦良親王子康仁爲太子、元弘二（正元）正慶二五七、依天下亂、主上幷兩院御沒落東國、此間爲伯州詔命、奉退皇位、（廿三）同年十二十、被獻太上天皇尊號、觀應三閏二廿、依南方主天氣、促仙蹕於八幡軍陳、（陣）兩上皇（光嚴光明）幷新院（崇光）、崇光春宮直仁親王等、御同車、八月八日、於河州行宮御落飾、法諱勝光智、御戒師西大寺元燿上人、延元々（文元カ）於河州離宮、由良覺明和尙、奉令著禪衣、（此時御諱上勝字被止之）同二二、奉伴新院出南方、幸伏見殿、貞治三七七、崩於丹波國山城國（行カ）、以此間御庵號、被擬追號、是依遺勅也、五十二、

東國（御沒落）

第九十八
崇光院

第九十九
後光嚴院
二品
義仁法親王　秦筝一流正統、住栂尾、
母徽安門院、對御方、公隆卿女、

〔本朝皇胤紹運錄〕　○群書類從本

第九十二
後伏見院

第九十六
光嚴院

第九十八
崇光院

第九十九
光子內親王
後光嚴院
正親町宮　義仁、

〔皇帝系圖〕　○前田家本

九十二
後伏見

九十六
光嚴

九十八
院（崇光）
九十九
後光嚴
尊朝法親王

〔帝系圖〕　○山城

九十二
後伏見院

光嚴院

九十八、興仁
本院　崇光院、
母三條內大臣公秀女、陽祿門院、
廢坊
直仁親王　母洞院大納言實
九十九、彌仁、明卿、宣光門院、
新院　後光嚴院、（女脫カ）
母同本院、

御室
尊朝法新王　母洞院大納言實明卿女、

女子　母同本
新院、

女子　母同本
新院、

女子　母同尊朝
法親王、

女子　入江殿、應永九年正月六日入滅、七十二歲、
母光福寺內大臣、（女脫カ）

光子內親王　一品入江宮、
母宣政門院、

〔臥雲日件錄〕　坤　長祿四年　五月七日、赴西山勝鬘院年忌齋、修山梅室曰、眞乘寺開山梅溪、乃後醍醐天王（皇）之女、始爲光嚴院皇后、後自剪髮爲尼、受開山衣法云々、

〔無規矩〕上之下 眞讃　意翁（圓淨）和尚

圓淨ニ歸依セラレ意翁禪師ノ宸筆ヲ賜フ

鷲峯孤頂占幽邃、影不出山三十祀、道流撥草趨門庭、玄辯倒瀉懸河水、固辭清見眞如招、棄捨榮名如弊屣、光嚴天子特傾心、寫賜意翁禪師字、靈巖門戶甚淒涼、臂端多力扶得起、播陽佛光（祖元）的傳宗、浩浩眞風徧天地、

〔智覺普明國師年譜〕（貞治三）甲辰夏四月、師到大光明寺、于時光嚴法皇聞師來、大悅對語終日、遺囑甚多、六月、賜御書曰、竊以、達磨一宗只在修禪定、禪定若不修、教外之宗掃地而盡矣、是以曾發小願、滅後將平生一鉢資緣、永代圓光專好坐禪者粥飯、切莫違我願爲幸、依此天龍別置常牧寮、安十六員僧、至今不絕、〇略中秋七月、光嚴法皇登霞、五七盡七御諱、皆奉勅陞座、〇上下略

御書ヲ妙莇ニ下シテ修禪ヲ勵マシ給フ

〔和琴血脈〕實子以朱引之弟子以墨引之

大納言氏忠――

光嚴院――

和琴ヲ學ビ給フ

前大納言冬宗――

琵琶ヲ嗜ミ給フ

〔伏見宮御藏書音樂部類目錄〕琵琶譜之部

一一人口決小形卷物

壹卷

僧眞觀法名良空、播磨余流口傳也、

嘉曆二年七月十一日尼如眞判

康安二年七月廿三日備光嚴院高覽訖、花押

隆淵法印狀別在、

御歌什

〔勅撰作者部類〕自帝王至庶人之部　光嚴院 諱量仁、後伏見帝御子、　風雅 春上二、春中二、春下二、夏二、秋上二、秋中二、秋下二、冬二、戀一、戀二、戀三、戀四、戀五二、雜上一、雜中四、雜下一、神祇一、　新千 春上一、春下二、夏一、秋上四、秋下一、戀一、戀三二、戀五二、雜上一、雜中四、釋一、　新拾 春上二、春下一、夏一、秋上一、秋下一、戀三一、戀五一、雜上一、雜中一、　新後拾 春上一、夏一、秋一、旅一、雜上一、雜下一、院御製一、光嚴院御製一、　新續古 夏一、冬一、雜一、

五首御歌合

〔風雅和歌集〕十六雜歌中　五首歌合ふ、雜、遠近を、

太上天皇

雲かゝる遠山松い見えもありてまろたの竹ま雨こやるかり

三十首御歌

〔新千載和歌集〕三夏歌　三十首御歌中ふ、里時鳥といへる事をよはせ給う

法皇御製

いとゞやも里かれまゝり郭公卯の花ろきまをちろへりかく

〔新千載和歌集〕十一戀歌一　三十首御歌乃中ま、

行ゝへ初天飛雲けゐよ初よも我思ふ人のとはかよもに　法皇御製

〔新拾遺和歌集〕二春歌下　卅首歌よませ給うきる中よ、

暮れもてゝ色もゆ〻れぬ花のうへよりのゝふ月乃影そうつろふ　法皇御製

卅首御歌乃中よ、

吹みさる花の志ら雪ゝきくれてあらしよ迷ふ春け山道

〔新拾遺和歌集〕三夏歌　卅首御歌の中よ、　法皇御製

心よいちゝきはもりけさちいおゝ乃立ちおれし世そと残さゝり行

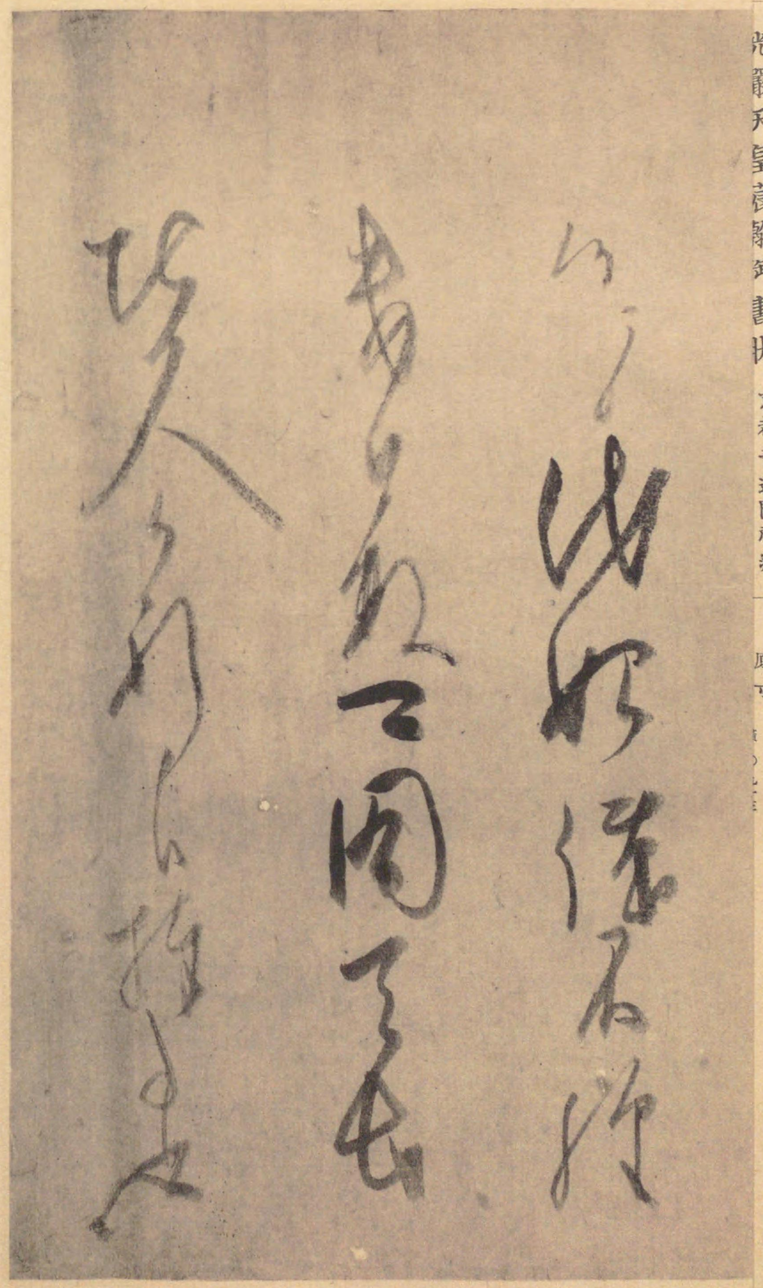
〔光嚴天皇宸翰〕〇子爵田中光顯氏所藏　宸筆御和歌

謹奉法樂日吉山王七社和歌　太上天皇量仁

神のあすおひえ乃山よすむ月のあゐねき影よ我しも従めや

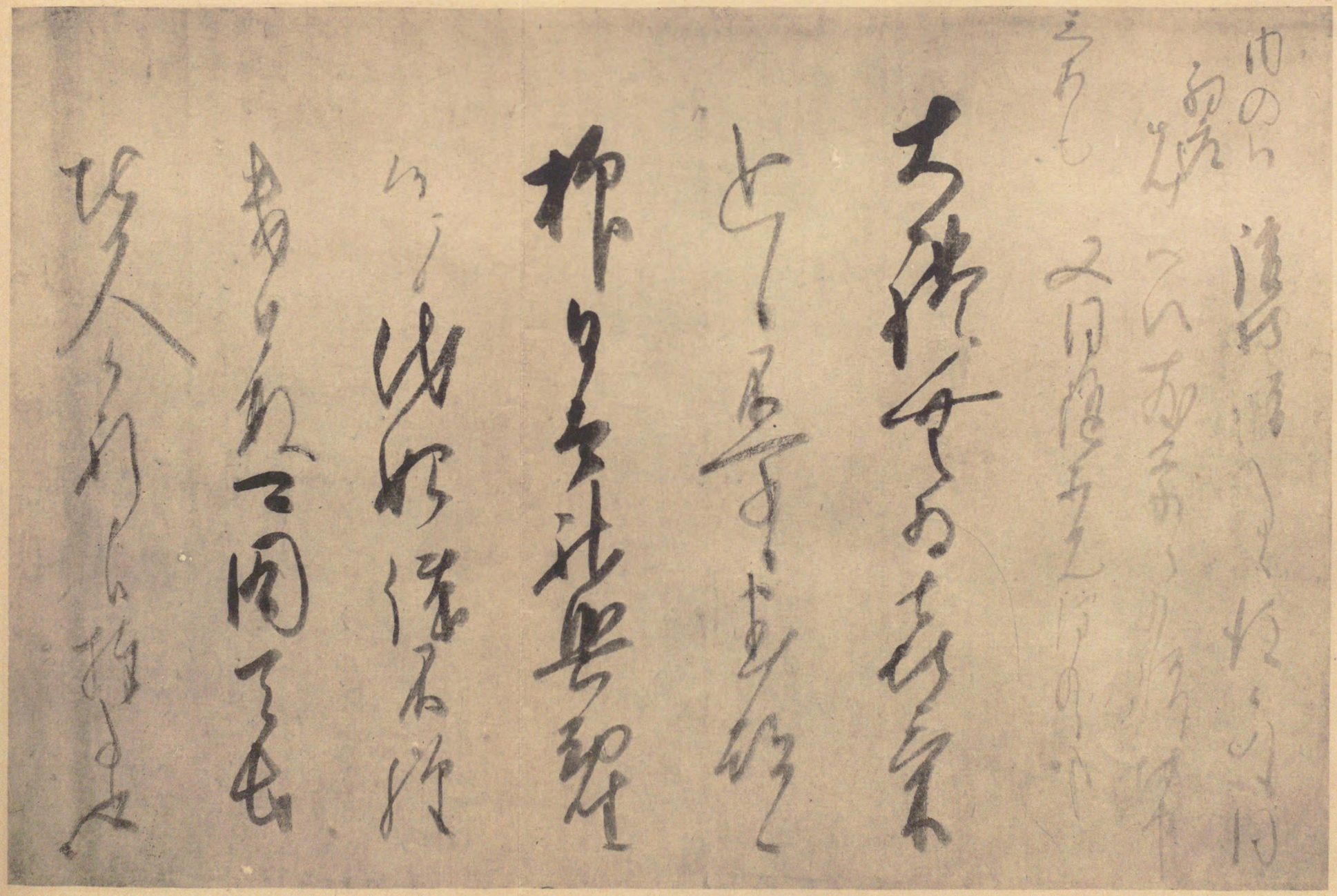
國やされ民やもゝらぬすゑの世も神の見おらはそゝしれさめよ

ち初よきゝれにこれる水よもそ月のもむやもよすや神てらし見よ



光嚴天皇宸翰御書狀　京都青蓮院所藏

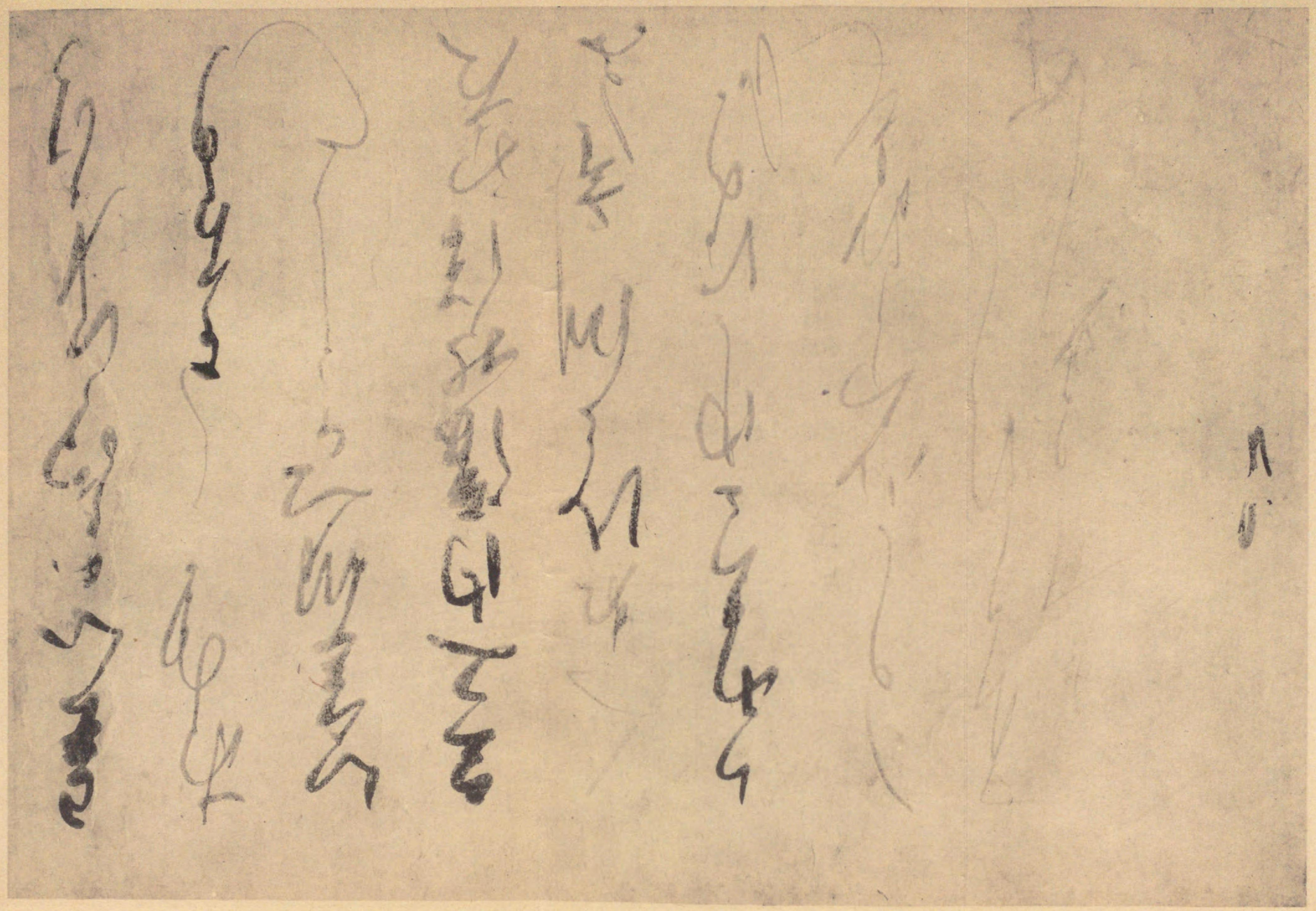
原寸　縦〇・三三米



光嚴天皇宸翰御書狀

京都 青蓮院所藏

原寸 縦 〇・三二米 横 〇・九一三



神よいれる我ふき事のいさゝろそ我さめならは神とろめ世ろへ
神とさのむ我もし神よもてられも神のちろひれおきよこそあらめ
神と我と二いおしと見るこゝろへさてしおくも見ろおいし給へ
ことの葉れろも〳〵神の見ろおいゝろちの世までのしるへとおきおれ

〔青蓮院文書〕（京都）

護持僧事は、後日のも同以次散蒙者爲悅候、坊中又同隨所見注給候哉、内のゝ初度事、先忩存候也、
大禮無爲、喜氣追日不可有盡期候、抑日吉神輿動座候云々、代始儀不經幾日
數、可閣天長地久御祈之由、捧事書候、異心□約之次第候けり、存外候々々々、
其間事、以宣明卿令申候也、兼又内護持僧初度人數、代々例不審事等候、御所
存等、内々注給候哉、事々非面難盡也、恐々謹言、

（光嚴天皇）
（御花押）

十一月五日（文和元年）

〔伏見宮御記錄〕目錄　元第二

光嚴院天皇宸筆

御文

南朝正平十九年　北朝貞治三年七月七日

三通